

第六章●元町・石川地区

第二節●横浜村から

(1) 外国人とともに

●横浜村から——ここでの元町・石川地区は、元町・石川町・打越の三つの町をいう。三つの町は地理的に山手の丘の一部または丘すそで、中村川・堀川に沿った細長い地区で、面積四〇・八ヘクタール、他の地区新山下三丁目の一カ町、四三・〇ヘクタールよりも狭い地区である。中村川・堀川や山手の丘をへだてて関外、関内、山手地区に、さらに南区に接している。

この地区は狭いながらも、関内や関外の地区より古い歴史を持つていて、近世、この地区の状況の一部は『新編武蔵風土記稿』によってうかがい知ることができるが、幕末開港期に、まず元町が歴史の上に登場する。沿革編に述べたように安政六年（一八五八）六月二日をもって、神奈川を開港場とすることにきまつたが、その神奈川は広い地域の意味であるとして、幕府は港の位置は横浜村を主張、これにたいする米国側は、あくまで神奈川宿の周辺を固執した。交渉難航の果てに、幕府は横浜村の主張を押し

とおした。

横浜村は洲干といわれた地に鎮守の弁天社をもち風光明媚な砂洲で、海辺にそって、半漁半農の住民およそ一〇二戸が居住していたが、これらの人々は万延元年一月、強制的に西側の谷戸坂、汐汲坂など、山手の丘すそに移住を命ぜられた。村ぐるみの移住であったから、村はずれの弁天社だけを残して、あとは全部移転させられた。あわただしい移転は、横浜村の住民にとって、困惑に満ちたことは十分想像されるが、住民は、地つづきの丘地の下（現、元町一帯）へと移住した。

●隔離——万延元年（一八六〇）、村民の新しい土地と、開港場となつた川横浜村との間を、居留外国人保護のために、掘割で断する必要が生じた。掘割はいまの山下橋あたりを河口として、いまの西ノ橋あたりまで掘り、これから先は野毛浦に通ずる川につなげた。この結果、開港場（関内）はぐるりと堀でかこまれた。堀には谷戸橋や前田橋をかけ、橋のわきには、関門を置き、折からの攘夷派浪士の暗躍に備えた。西ノ橋は石川口番所と称して、警備の武士がかため、人々の出入を厳しく取り締まった。

●元町発祥——このことよって、ここは旧横浜村の開港場とは隔離されたものの、隣接地域として実質的な歩みをはじめることとなつた。

横浜村からの移住民の新天地は、細長い平地で石川・中村へつつづき、山手の丘を背負い、丘の中程には地藏坂があつて、根岸



前田橋の閘門、右手川の向うは居留地



杉山大弁財天の碑（左）（元町薬師堂境内）



堀川で遮断された元村“市民グラフヨコハマ46号”より

や本牧に通じていた比較的便利な土地であったものの、村の人々は農地や海の生産の場を失なってしまっていた。

こうしたなかで、山手の丘は、外国軍隊の駐屯により基地化し、明治初年撤収をまって外国人居住地となり、その住宅が次第に増加、外国人の居住が定着化していった。

山手に外国人の居住が増加するのにしたがい、この地区は、外国人の商社のある関内（現、山下町）と居住地（現、山手町）とを結ぶ中間の地点として、外国人の日常生活上、必要な物資の一部を、供給する恰好な土地となった。生産の場を失なった移住民にとっては、好んでも好まなくとも、外国人相手に商売や、外国人のために労働などを行うことになったのである。

いま、元町は国際的な町といわれるが、その遠因はこの時点に求められるだけでなく、移住民が生きてるために外国人を相手にせざるを得なかった、といえよう。

文久三年（一八六四）になると、ほぼ現在の町域にわたって、街並みができ上り、「もともとここは横浜村だ」といったニュアンスからか、元村のほか本村、あるいは元村町、と呼ばれるようになった。

● 影響 ― 外国人とのかわりをもった元村の隣接地、石川、中村は一带の畑地で、もともとそこに集落があったが、元村の性格が次第に鮮明になるにつれて、隣接にも影響を与えることになっていく。

拡張される堀川



もともとこの元村には寛永二年（一六二五）の中興（横浜市史稿・社寺編）といわれる増徳院があり、村人の信仰が篤かったが、元村の街並みがととのうにつれ、その象徴的存在となったことはたしかで、いわば門前町的な街並みが形成されていった。既成の集落にたいして、元村はこれらの地区の核的な存在となっていたのである。

そして前田橋の向いの丘、高さ約九丈（二七・三メートル）あまりの浅間山は、眺望のよい台地で、ここから見下す港の風景はすばらしく、内外人によってにぎわい、名所となった。これも元村の人寄せによい条件となった。

●転向——このような元村へは、今までの人々のほか、他所から来て開港場横浜で功をなし、財をなそうとした人々の移住も多かった。これらの人々は、自らの持つ職を活かし、外国人向けの新しい商売に少しづつ転向していった。いわば元町では、外国人とのかかわりのなかで、新しい技術と知識を必要としたのであった。

いま、この町に言い伝えられている新商売への転向組は、大工は指物師、建具屋は西洋家具に、馬具師・荷鞍屋（バンコ屋）は椅子の布張り、足袋屋は椅子の覆、塗師はペンキ屋、袴職人は洋服、鍛冶屋・銅工屋は食器類など、それぞれの職人になったという。ありうる話である。

●新商売——転向の職人は、外国人向けの製品の製作にあたっ



“横浜村増徳寺真田家老望月主水固メノ図”（安政元年）——元村のスケッチ、一帯は田圃、右側山手の丘には樹木が茂っている。

た。その代表的なものは西洋式の家具であった。

元町の西洋家具は、開港の初期、英人ゴールマンが元町の製箱職の箱安と馬具安の二人に、型状、寸法を示して洋家具を作らせたのが始めとされている。この西洋家具は、開港直後の頃は外国人が持ち込んだ家具の破損修理であったようだが、次第に外国人の居住が多くなるにつれて、新しい家具の製造が必要となった。

それに、日本を離れる外国人にとつて大きな荷物となる家具は売却されたため、これを引き取って商売とする道具屋も出現することとなった。

しかし、こうした西洋家具だけにとどまらず、山手の外国人の家屋の煙突や厨房などの修理も当然必要になってきた。「うちは慶応二年にひいじいさんが元町に来たんです。まあ一旗組なんです、金物をやつてたんで、銅工屋になって、外国人の住居へ出入したんです。ストーブの煙突修理とか、かなり仕事が多かつたようですね。

銅工屋も、仕事をするとき、消し炭で前もつて床などに寸法などを書くんですが、あるとき、異人から細工物をたのまれて、それをやつてたんですが、異人を見かねたらしくつて、白墨をプレゼントしてくれました。ひいじいさんは、これは便利だ、いいものだって、小おどりして喜びひどく感心したそうです。それにハンダや塩酸を知つて、ピクピクもので使い方を覚えたださうです」(元町 荒井正治氏談)

「小林さんとおおじいさんは、俺はレンガ積みを外人におそわつたんだ。腕は(技術)横浜で一番だ、といつもいばつてましたね」(元町有志座談会)

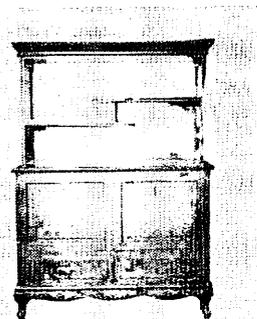
「水道屋もありました。外国人の住宅は明治時代から、浄化槽を作つて、水洗式としていたので、水道屋が古くからありました」(同上)と言う。また、外国人とかかわりのなかで珍談も生れた。

「おじいさんは海軍病院の兵隊から、金物細工の仕事を頼まれ、集金に出向きましたが、名前が判らず、まごまごしていると、隊長が兵隊を全員整列させ、『さあ探せ』と言われたが、どれもこれもみんなひげづらで赤ら顔だったので、見分けがつかない。とうとういいですつて帰つてきてしまったそうです」(荒井正治氏手記)と笑えぬ話もある。外国人住宅をひかえた元町ならではのことであった。

日常生活に必要なものの一つ、衣類の洗濯もまた新しい技術によつて行われた。隣接地の石川町(現、元町五丁目)では、元治元年(一八六五)、小島庄助によつて西洋洗濯の店が開かれ、この近くでは脇沢金次郎らによつて大々的に営業が行われた。山手に駐留するイギリスやフランスの駐屯兵や上陸する下級船員らの洗濯物を一手にひきうけ、巨利を占めたという。

これ以来、元町、石川、さらに周辺にまで同業者が増加していったという。

●ジェラール——元町は、こうしたほかに山手外人墓地の下には



西洋家具(神奈川県美術風土記・明治大正編より)



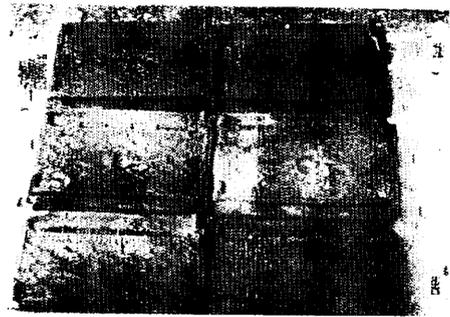
初めの頃の西洋洗濯(正写横浜異人図画より)

小規模ながら工業も発祥した。明治初年にイギリス人ジェラルドによって洋瓦の製造が行われたり、山手の丘からの湧水をもって船舶給水用とする初期的原始的な企業がはじまった。その水の湧く場所（元町一丁目元町公園あたり）を、土地の人々は水屋敷と呼んだ。瓦と水屋敷にかかわりをもったという人の子孫は次のように語った。

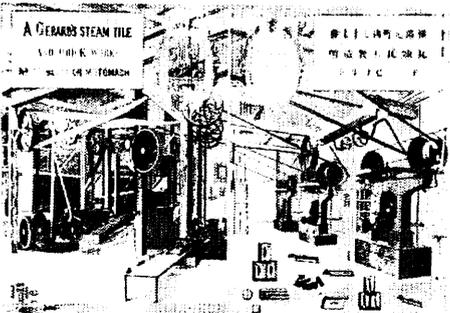
「私の祖父は金子藤吉と言います。藤吉は兄弟二人とフランスの人ジェラード（ジェラルル）とで元町の瓦工場を経営していました。その工場と一緒に、あの水屋敷で、ジェラード給水会社をやっていました。場所は山手の七七番でした。中国人が大ぜい使われていたようです。瓦の土はフランスから持ってきていたといえます。この前、こわした蔵のジェラルル瓦を納屋に算^かっています。が、今もって凍てる事がありません。屋根屋がこれはいいもんだってほめていましたね……。瓦には一八八五年と彫ってありますね。

祖父達がジェラードと知り会ったきっかけは、わかりませんが、祖父の兄弟、常蔵、兼蔵といった人たちは英語をさかんに習っていましたので、それが縁かも知れません」（本牧町 金子富太郎氏談）

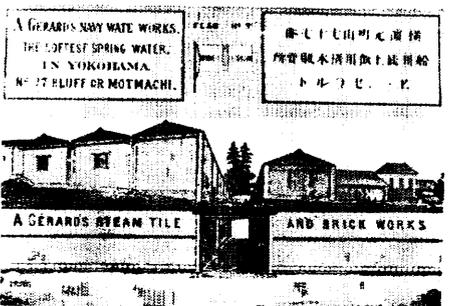
●水会社——「ジェラルルの瓦は、そのうちにだめになったようですが、給水会社の方はうまくいって、大分もうけたようです。元町一丁目のウチキパンの上を上げていくと、坂の手前にれんが



ジェラルルの洋式瓦



洋瓦製造所の内部（“横浜銅版画”より）



清水販売所（水屋敷）（“横浜銅版画”より）

で積んだ水槽があります。それが給水会社のはじつこに当たっているとわわれています。なんでもあそこには、井戸が何本もあり、その百坪ぐらいで深さ四メートルぐらいのきれいな澄んだプールみたいな水槽がありました。水屋敷から鉄管でもって、増徳院あたりまで引いて、水舟に乗せたといわれています。

水会社がだめになって清算することになりましたが、ジェラルルが六割、祖父達が四割ということで、フランスへ連絡したのですが、奥さんも子どももないので、その金は、フランスの修道院か何かに寄付されたと聞いています。金額などはわかりません」（同氏談）

これらのことは、いずれも、外国人の知識、技法、材料による

もので、まさにこの地区も文明開化の恩恵をまともに受け、日本人の職業として地域的に定着をみせたものであった。

元町は、外人相手の商業地としてだけでなく、こうして職人の町で家内式工業の地として並行したかたちで発展していく。いまは少なくなっただけとはいえ、元町の裏路では、ニカワの匂いの残りがあふれるかと思えば、表通りにファッションの色彩があふれるのも、その遠因をここに見るのである。

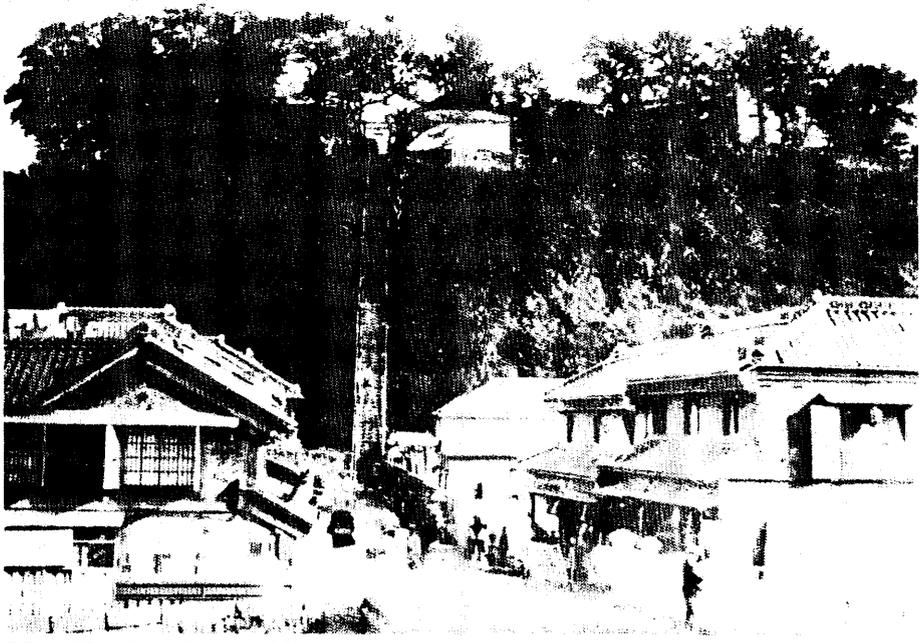
●表通り——元町の二面性は、くつきりと色あざやかに浮き上がったが、その発展が見られたのは、やはり町の表通りであった。

住宅が増加するとともに、元町は家具や洗濯だけのものではなく、外国人の日常生活必需品を供給するますます便利な町となったが、次つぎと日本人経営のパン、洋菓子、Yシャツ、洋服仕立、マッチ、煉瓦、銀製器、塗物、花、野菜、果物、肉、時計など、多様化して供給を活発にした。外国人の使用人のアマ(阿媽)さんの買回る姿が多くなったのも当然であった。

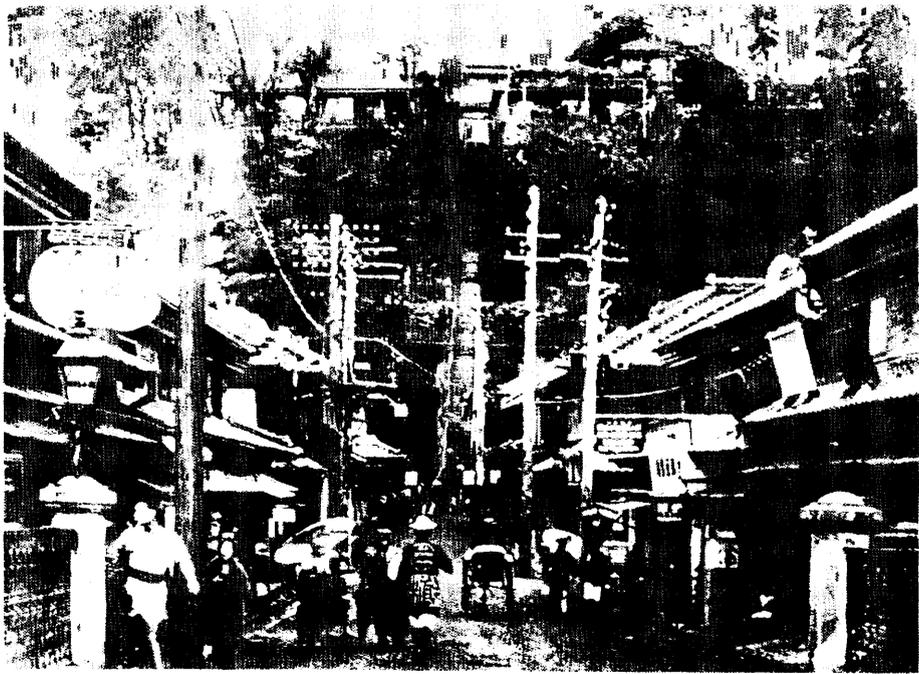
●石川へも——こうした傾向は、単に元町だけのことでなく、石川町にも拡がっていった。明治に入ってその数は増したようだが、『横浜社会辞彙』によれば、明治十年(一八七七)までには次のような店が発祥している(店名と所在は大正初期のもの)。明治二年に、松屋の前身鶴屋(石川町亀ノ橋わき)、上総屋染物工場(石川町七丁目)、五年西洋家具の大河原工場(元町二丁目)、鍛冶の



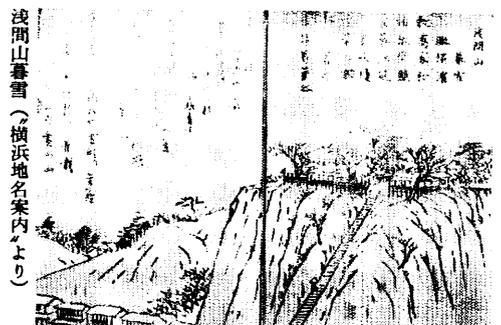
元町の街並み——いまの元町1・2丁目、左は増徳院、明治3年の風景(“市民クラブヨコハマNo46”より)



元町の百段（明治中期）——直線に石段100段がある，耐火構造の町並みである，現在の前田橋位置から見る（横浜市図書館提供）



元町の百段（大正初期）——町は前掲の明治中期とくらべて一段と市街化している



浅間山春雪（横浜地名案内より）

森田鉄工所（同四丁目）、六年建築金物の梅川鉄工所（元町一丁目）、七年汽罐^{ちかん}など製造の大竹鉄工場（石川仲町三丁目）、本市最古といわれる西洋室内装飾品の工場武内商店（元町三丁目）、十年十月、椅子、テーブルなどの長津家具工場（元町五丁目）などであった。

●百段——とにかく元町は内外人によって賑いをみせた。増徳院の縁日、そして町のなかほどの浅間山の見晴台、通称百段からの見晴しは、港内に出入する艦船や、本町、弁天通、太田町は手にとるように見え、遠く神奈川宿の旅籠屋^{はたご}やお茶屋まで、二里四方が見渡せた。百段の石段の上には浅間社という小祠があって、小さな茶屋もあった。「石段を寄進したのは、勘次郎という運上所御用船の親分で、外国艦船の貨物の積降しのはしけを一手にひきうけていた人物であった」〔横浜どんたく・下巻〕より〕

この名所百段は震災によって崩れたままで、今は原形をとどめていないが、震災前までは町の子どもたちにとってはよい遊び場であった。

「あそこはよそに比べて高台なので、外国人がよく港の写真を撮っていました。子どもも頃竹馬で百段を上る遊びをしたが、容易なことでは登りませんでした。竹馬ですから降りるのはとつてもむつかしく、十段か二十段降りるのもやつとのことでした。それができるとそれは大変な自慢でした」（元町有志座談会）
とにかく、この地区は商業の地域として、関内とはひと味違っ

た外国人相手の町として栄えてゆくことになる。

(2) 港の外がわ

●耐火構造——明治に入った元町は、横浜の近代化にもなつて、町としての性格がはっきりしたものとなった。しかし、この町にはたびたび火災がおこり、町域を焼いた。明治十二年（一八七九）一月には三〇〇戸、十六年（一八八三）十一月には四五五戸、それから十年ほどして二十六年（一八九三）六月には大火となつて、ほとんど全町の一、六六四戸を失い、翌年六月に一〇六戸をまたまた焼くという火災があった。いく度となく生じた火災ののち、これにこりた町では、土蔵造りの耐火構造の街並みとなつたという。

●増徳院——こうした火災を経験した元町の、その頃の町を象徴するものは相変らず増徳院であった。いまの元町一丁目一三番地一帯にあつて、関東震災では本堂、庫裡、薬師堂、弁天堂などそれに二本の大きなイチョウなどが壊滅的な打撃を受けた。元町の人びとにとってはなつかしい寺院であった。

震災後、増徳院は南区平楽に移り、元町には薬師堂のみが残り、震災後再建された。鉄筋コンクリート造り、階下は車庫。

「境内の金比羅様は一段高い所にあり、大きな木の下にお地藏様がありました。石段を昇ると右側に神楽堂がありましたね。境内には鉄の一本歯のげたがありました。増徳院の本堂、薬師堂、弁



増徳院（明治中期）（荒井正治氏提供）

天さまは、今の元町プラザの所辺りです。今のウチキバン寄りには金比羅様や地藏様がありまして二本の大イチョウがどこからも見られました」(元町有志座談会)

◎色薬師——薬師の縁日は異国情緒があふれていた。元町薬師の縁日は明治二十年(一八八七)前後に、賑いを見せ、三十年頃には最高潮に達した。薬師の縁日は明治初年頃に決められたといわれ、毎月八日、十二日がきまりであった。縁日には、堂前から元町の両側に並ぶ露店商人のカンテラの裸火とランプの光りとに、集ひ来る人々の群に混って、外国人は家族一統を引具して、三々五々晚餐後の散歩に異境の夜をあこがれたのである。洋妾は濃艶なる姿体をぼっくり下駄に乗せて、旦那なる異国人と腕を組み歩き、縁日の夜の色どりに濃い景情を浮べて、一際特異の異国情緒を添へ、裏町や代官坂辺のちやぶやの賑ひも、此夜頃を書入れ時とし、洋妾仲介の労を取るもぐり茶屋の鋭牙を研ぐ活躍の夜頃を現出し、混血児と日本娘との情意投合も、薬師が取り持つ縁日の夜の所産であった。されば薬師の縁日は、一面異国ぶりなる恋を取り持ち、赤き縁しを結ぶ舞台として、其名も色薬師と呼ばれ、国際的情景豊かな縁日として、長い間の存在を見せて居た。

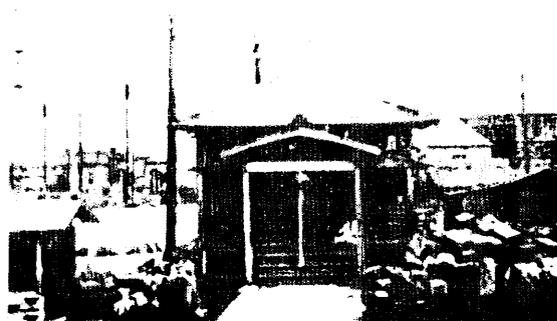
横浜名物と唄われた斯かる縁日も、大正以後は見られぬ昔語りとなつた」(『横浜市史稿・風俗編』)

縁日はまた、外国人青年と、日本ムスメが時ならぬ恋をめばえさせたというが、これもまた横浜ならではのことであった。



元町の街並み(明治中期)——山手の丘下、元町の遠望、左手は山下町、港には船が見える、石川町より見る
(高田重次郎氏提供)

震災後の薬師堂



「薬師さんの縁日は、色薬師と言って縁結びの薬師さんと言われてました。縁日は石川町一、二丁目、今の地藏坂にかけてもありましたが、そこは四の日、元町は八と十二日で、これにはたくさんの西洋人や中国人が来ました。

表通りの両側で、バナナ売りや夜店が出て、大勢の人でにぎわったもんです。それに、石川から大丸谷にかけても、はみ出すような調子で：そこには植木市も並んでいましたよ。

薬師縁日は色縁日といわれるだけあって、芸者さんや、チャブ屋の女の人、それに外人さん、国際色豊かなムード一杯でとっても繁盛したもんです。外人だつてその頃は皆、浴衣姿で子どもづれで来たものです」(元町有志座談会)

●香り——当時の元町のたえずまいは、「元町の通りは葉巻の香、草花の香、香水の匂ひ、チョコレート、コーヒー、ココアを煮詰める匂ひとが一つになって、往還の空気の中に溶け込んで居る。晴れた春の日の午後陽ざしの裡に、甘い優しい其薫りが微風の底を流れ、空気全体が天鵞絨に似た感触で頬を撫で、明るい町の春は一層の明るさを添へて、異国情緒を濃厚に浮び出して居るのである。大地の下からはまだ緑の芽が萌え出ぬ前に、元町の花屋の硝子窓の中へは、花と云ふ花が並べられるのである」(『横浜市史稿・風俗編』)

●公の施設——こうした国際色豊かな元町には、次第に居住者が増加していった。元町にはいままで、公共的な施設は少なかった。

この地区の公共的施設のはじめは、明治五年の学制によって翌六年に創立された学舎だが、それのちに元街小学校となって、現在の山手町一六番地に移転してしまつた。しかし、元町は山手の丘下、その環境のよさもあつて、三十二年一月、中村正義によって横浜女学校(後、横浜高等女学校)が汐汲坂の途中に創立された。この学校は、のちのことになるが紫の袴を制服としていたことから、別名「むらさき高女」と呼ばれて市民から親しまれる学校となつた。この学校の創立は山手の女子教育地域を延長することとなつたが、元町での新しい公的施設のはじまりといえた。

この学校の創立につづいて、明治三十年代には元町はじまつて以来の銀行が開店した。三十三年(一九〇〇)四月に元町貯蓄銀行(頭取中山沖右衛門)が五丁目に、三十四年七月には横浜七十四銀行元町支店が二丁目に、それぞれ開設された。

のちの大正九年(一九二〇)十二月には、この横浜七十四銀行の方は横浜興信銀行に業務がひきつがれて横浜興信銀行元町支店となり、元町貯蓄銀行も横浜興信銀行に合併することになるが、銀行の進出は元町の繁盛を示すものであつた。

この間、元町にはさまざまな外国人向けの商売が発祥していくが、明治二十九年(一八九六)二月、外国人の横浜観光案内のため、通弁(通訳)を業とする開誘社が一丁目に開業しているのも元町らしきが見られる。

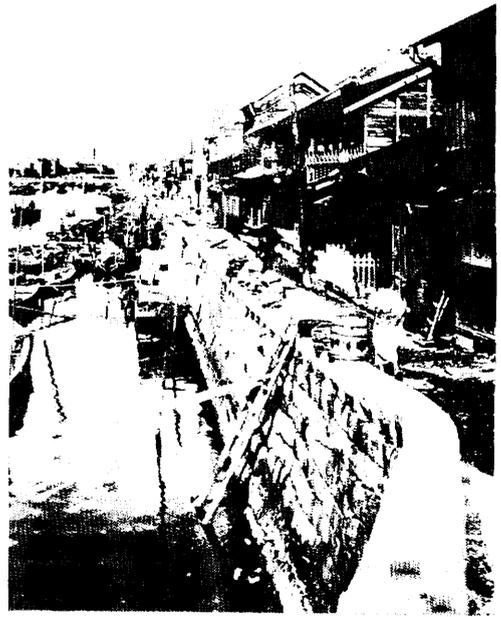
●石川町——一方、中村川の川沿い石川町から中村町方面にかけ

ては、港や埋地方面に働く人々が多く居住地とした、石川町一帯は人口が増え町が大きくなり、そこには規模は小さいが、多種類の日常生活品を売る商店が発生していった。このことは外国人を相手として商売する元町とは対照的であった。すでに石川は明治六年一月には街並みがととのつた所として、石川町と命名されていたが、こうして町が充実していった。

●船舶給水——石川町の先、中村の打越は都心部をはずれた環境のよさから、丘には病院も出来ていた。またその台地は、自然の湧水が豊かであったことから、元町の水屋敷とともに船舶用の水の供給地でもあった。

船舶給水が事業として始まるのは、『横浜水道七十年史』（横浜市刊）によれば、まず明治元年フランス人アンボーが、山手町七五番、現在の元町プールの、俗にいう水屋敷から、船舶給水をはじめた、翌二年には海老塚與次右衛門が日ノ出町裏の湧き水をもって営業を開始、さらに明治十年にはイギリス人マーテンが十二天で、十三年には寺田某、村田某が現在の赤門町二丁目に溜池を作り、初音町まで木管で導入して営業をしたとされているが、港に停泊する船舶のためにはこの事業は大切なことであった。

石川町方面でたしかなのは、明治二十七年（一八九四）個人経営によって始められ、三十七年法人となった長塚良水合資会社がある。この会社は柳橋ぎわや車橋ぎわから、ダルマ船によって水を積み込み、船舶に給水したのであった。地元の人は次のよう



石川の川岸（明治中期）〈小松房吉氏提供〉

にいう。

「私は、昭和三年の切通し開削のとき、がけの上の方の湧水の出口の穴を覗いたことがある。もちろん奥行は分からなかったし、穴の天井が岩盤でなく、れんがのようなものでトンネル式になっていたことだけは分った。それにこの口から三百メートルほどがけ下には、もう一カ所現在でも水の溜っている所がある。昔はここまでトンネルでつながっていたのではないかと思われる」（打越岡田克巳氏手記）

●遺構——ところが、このがけが昭和五十六年十一月のこと、大雨によってドッと崩れた。高さ約七メートルのがけの土砂は、隣



石川町の川岸（明治後期）——商店が並んでいる、護岸と西ノ橋の架け替工事が行われている。丘は山手。



きつちりとした石組の軒、右手から清水が湧き出ている（中土木事務所提供）

接の低い宅地に流れ込み、このため横浜市中土木事務所によって土砂排除が行なわれた。

そのときがけ下から岩盤をくりぬいた水槽と、それにつながる横穴が発掘された。清冽な水が槽を満たしていた。水槽はたて約三・五メートル横約二メートル、深さは推定二・五メートルのもの。

横穴はたて横とも推定一・五メートル。深さは不明であった。穴の岩盤はノミで掘削され、その横穴からはこんこんと清水が流れていた。さらに、水槽の横からも、音をたてて陶管に導かれて流出する水があった。この水槽は長塚良水合資会社のもので、遅くとも明治三十七年頃のものとして推定され、船舶給水事業の唯一の遺構であった。

がけの補修は防災上緊急に行う必要があり、結局、原形が留められず、その水槽の上に擁壁が造られたのであった。

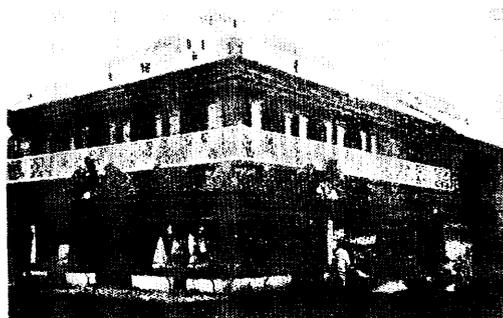
●元町の隣り―自然に恵まれた打越にたいして石川町は、元町からの影響をさほどに受けることなく、さきに述べたように、港湾関係の労務者も多くここに居住し、それなりの発展を見ることがになるが、打越の場合も相変わらず、丘地には人家もまばらな状況であった。この状況から脱するのは、昭和に入って切り通しと市電の開通により、山元町と地形が平面的につながる時まで待たなければならなかった。

(3) 地蔵坂界限

●鶴屋―明治から大正にかけて、石川町の地蔵坂は、関外と根岸・本牧を結ぶ幹線道路として、交通上の重要な地点であることに変わりはない。それにこの坂は長者町を経て伊勢佐木町から直通であったことから、新たに坂の入口亀ノ橋付近は鶴屋呉服店を中心として繁華な地点となった。

「亀ノ橋わき、今マンションが建てられた所（現、石川町三丁目一〇四）、そこが松屋百貨店の発祥地です。

鶴屋は初め、瓦葺きのすごい家でした。二階建てでしたが、後に丸いドームを作って三階になったんです。入口は昔の芝居に出てくるような呉服屋さんと同じです。のれんを下げて……。相撲がある時は勝ちを赤、敗けを黒で書いてウインドウに張り出しま



明治末期の鶴屋

す。まあサービスなんでしょうが、当時ラジオというのはこのウチでもなかったから、皆でその勝ち負けを見にいったもんで、楽しみでしたね。

このお店は古屋徳兵衛、金兵衛さんの二人の経営でした。金兵衛さんが御主人ですが、親分肌で、頑固な人で、体格もまた立派でした。本當にご主人らしい人でしたね。徳兵衛さんの方は、細面せまづらで、背の高い紳士的な人でした」(石川・打越有志座談会)

鶴屋は明治四年(一八七二)にはじまるが、西南戦争の頃には、すでに横浜で有名店の一つとなった。十八年に東京の松屋呉服店を併合、主力が東京に移って松屋の支店となったが、明治四十三年九月、鶴屋呉服店の店構えが近代的デパートに改築された。談話にある丸いドームはこれで、横浜においてデパートのはじめとなった。大正十年(一九二一)一月三十日、火災によって全焼、以来鶴屋の主体は東京に移ることになった。鶴屋は、松屋の商標の鶴に、その縁えりを今に残している。

●日光屋敷——明治末期から大正末期にかけて、地蔵坂の上の角地には日光屋敷と呼ばれた、ホテルと集会所を兼ねたテンプルコートがあった。ここへは外国人が多く出入りしたが、日本人も使った。一とき山手に住んだ作家谷崎潤一郎も出入りしたという。

町の人々にとって、日光屋敷の想い出は多いが、次の随筆によってもそのおもかげをしのぶことができる。

「浜ッ子が、『日光御殿』と呼んでいたように、東照宮を模した

神殿構えが朱泥と金泥で塗りあげられた大建築で、その大屋根の上には直径三メートルもある極彩色の巨大な鬼瓦が据えてありました。

そこで問題は、この鬼瓦の巨大玉が、住宅の窓を睨み据える位置にあったことです。フランス人の家族に病人の絶え間がないというのです。

思案にあまったフランス人は、真鍮で二尺ばかりの大砲をつくって屋根棟に上げ、鬼瓦の目玉を狙うようにいたしました。それからは、病気になることもなくなったということです。

古い話です。

私がここを通ったのは、大震災の翌々日でした。野毛山の住居から焼跡を歩いて本牧の友達の家へ行くために、地蔵坂を登っていたのでした。

巨大な鬼瓦は、坂の途中に転げ落ちて半ば毀れておりました。相手の大砲はと見ると、この家は毀れもせず、大砲だけが、その筒口をあらぬ空へむけていました」(河西春海『呵々山房雑筆』)

●地蔵坂——次頁は、明治末期から大正にかけての地蔵坂の風景である。汗をぬぐう人力車夫、二頭立ての馬車がくる。遠く坂の上から荷車も数台降りてくるのが見える、正面は日光屋敷敷か。

この地蔵坂には、名の由来となる地蔵尊が祭られていたことから、元町の薬師とともに縁日があり、露店が出てにぎわった。この最盛期は昭和の初め頃までつづくことになる。



地蔵坂風景——正面は日光屋敷の裏く（ニールベトラ氏提供）

当時この坂は交通の要衝ではあったが、だから坂で交通の難所であった。荷車や馬力車などによる物資・資材の輸送のときは特に上りにはあと押し、下りにはうしろからブレーキをかける人がいなければ通行はむづかかった。

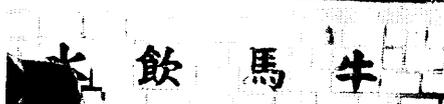
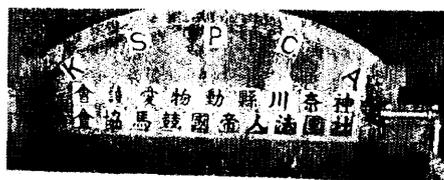
このころの大量の物資輸送はおおかた馬力に頼っていたものであった。

「むかしある時、馬力の馬が、だから坂と重荷に耐えかねて、倒れてたそうですが、その姿が外国婦人の目にとまり、そのあとその婦人の力で馬の水飲み場が作られました。石川の橋のたもとと、善行寺の曲り角などに大正の初めからありましたね。その管理は軍人上りの佐々木中尉という人が世話役で、毎日見廻りしました。夏になると馬にはむぎわら帽子を耳だけ出してかぶせてました。こんな風情は関東大震災まで続いています」（石川・打越有志座談会）

●馬と——地蔵坂は馬とのかかわりのなかで成り立っていた。「お地蔵様に『だいしん』さんと言う尼さんがいました。町内の者をはじめ、誰からも好かれる人気者でした。緑日の日は、尿はお地蔵様の前に立ち、たくさん通る荷馬車に向って『お馬や、お地蔵様のお供え物をケがせぬように、おあがり』と、おぼんにもった小さな赤と白の打菓子を持って、登りくだりの馬におそれげもなく近づいて、大きな口へ二つ三つ入れてやっています。利口な馬は前へ来ると動かないので、急ぐ馬子が手綱を引くがまだ



水槽が置かれていた例——桜木町公衆食堂前、大正15年頃



牛馬飲水用の水槽〈本多正道氏提供〉

動きません。だいしんさんが『よしよし』と言って、口に供え物を入れてやると、やっと馬が動き出します。

往來のはげしい坂で小さな尼さんと、大きな馬のこんな楽しい光景もあったとか。これは母の思い出の一こまです」(同座談会)と、これも、この頃の地蔵坂にまつわる話である。

●いわしこ、いわしこ——元町から先の地域は中村川に沿って東西につらなる石川町、丘寄りの仲通りは石川仲町(明治二十二年四月一日新設の町)とであった。ここには、港灣労働にたずさわる人々の定着がますます多く、山手の下町、そして元町の地つづきの丘地から、むしろ過密ともいえる街並みとなり活気を呈していた。

石川町の活気のもととなるのは、各種の小売商店の営業そのものであったが、ここへは町の人々のほか、中村町方面からの、港で働く人々の通勤路となっていたため、その賑いに拍車がかけられた。通路であることは、元町と似ていたが、元町が外国人相手であるのに対して、ここは市民の町で、元町とは性質が大きく異なっていた。

—地蔵坂入口付近にお店もかなりありましたね。例えば、登り口左側の鯛焼屋さん、少し上って打木パン屋さん、中間のあたりに馬の水飲場、後は石垣、右側は登り口に天ぶら惣菜屋さん、また上って、羊かんとくず餅を作り、箱型の荷車にのせて卸商をされていました店、蓮光寺を過ぎたその上には比企野靴店、この店に

は外人客が多く、絹のハイヒール等が店頭に並んでいたのが印象的でした。更に岩本洋服店、遠くからのお客がくるので評判の松下理髪店などが並んでいました。洋服屋さんでは当時、炭を入れるアイロンで職人さんが仕事をしていました。それに傳屋さんもありましたね……」(同座談会)と町の人は語っている。

「仲通りをふくめて、通りには食物をはじめ、あらゆる日用品の店が並んで、夕方になると、マユ屋敷やお茶場帰りのおかみさん達が、よくここで買物をしてましたっけ。

それに『いわしこ、いわしこ』って本牧あたりからかごをかついで、夕方になるとよくこの辺へ売りに来ました。これを『夕岸』と言ってましたね。一皿五厘か八厘かです。二銭も出すともう目かいぎるにいっぱいでした。野菜も青物市場から、どんどん入ってきますしね。石川町は暮すのに便利な町でしたね」(同座談会)

●二新造先生——石川町と石川仲町との差は特にならない。二つの町には連合衛生組合が組織され、事務所は現在の二丁目八五番地の所にあつた。この辺がいわば石川町の中心といえた。事務所の隣りには私立の篠崎学校があつた。

「篠崎学校は旦那が校長先生で、奥さんが先生、ふたりだけでやっています。奥さんを『御新造先生』といって、英語が得意でしたね。生徒は五〇人もいたかな。教室というほどのもんじやないが教場は十畳二間位でした。

この学校でも普通の小学校と同じ事を教えていまして、希望者には補習で珠算や英語を教えていました。校長先生はたしか、本牧出身の人です」(同座談会)

この学校は、明治二十一年(一八八八)十二月石川仲町三丁目に創立、その後増設されて、大正の初期には校地一〇一・七五坪(三三六・四平方メートル)、教室六五・五坪(二一六・五平方メートル)、児童九九人を收容することになるが、石川町にとつては、これは目新しい施設であったが関東大震災前に廃校となった。

●連帯―下町で住宅がこみ合っている石川仲町の人々は、相互の親睦が強かった。連帯が顕著になるのは、祭礼や青年会活動のときなどだった。

「若い頃は町内会がありませんでしたので、町の有志という顔役がいてその人達が寄付金集めをしていました。ほかに若い衆とその頭がいて祭を司っていました。今年は二五〇円とか三〇〇円とか集まったからこれでやれって、有志が若い衆頭に金を持ってくるんです。そのほかは大尽(金持)の家から、寄付金をもらってやっていました。

石川町三丁目だけでも若い衆が二七人位いましたね。張切っていましたね。若い衆のグループは各町別々にありました。年寄りには有志ということで、別格だったんです。もともと、祭のときの警察の許可などを受けるのは年寄りがしていましたよ。

町内ごとに神輿を出すんです。町によっては二台持つてる町も

ありました。それで、その神輿の金具なども立派でしたね。戦中供出してしまいましたかね。祭の終わった後は『はち払い』まアいまでという慰労会なんです、これをするのが楽しみでした」(同座談会)

町の人は、このように思い出を語っているが、青年たちが、この下町石川町の活動の原動力であった。のちの震災復興には、これらの人々の協調とその奉仕が、大いに発揮されてゆくことになった。



石川町の川岸に御輿がくり出す(昭和初期) ――子供たちがあとにつづく、対岸は寿町(高田重次郎氏提供)

第二節●横文字と職人の町

(1) 職人衆の町

●外国人相手——大正に入ったこの地区の元町は、ますます外国人相手の町として盛況を見せていた。人口約一万二千人の元町の通りには、家具屋一二軒、洋花屋六軒、西洋野菜も扱う八百屋七店、婦人服専門店五軒などが中心となつて各種の店が集中していたという。

作家谷崎潤一郎は、大正の元町を次のように記している。

「山の上にある外国人の居留地から、朝に夕べに各国の人びとが、いろいろな風俗をして坂道を降りて来る。

……散歩好きな西洋人たちは、男も女もそろそろと歩いてやってくる。坂の中途から街通りへかけて、彼等を相手とする花屋、洋服屋、婦人帽子屋、西洋家具屋、パン屋、カフェー、キヌウリオシタイ・ショップなどが一ぱい並んでいる」(谷崎潤一郎・『肉塊』)
元町の店の看板は、ほとんどがローマ字や英文であった。元町の子ども達はスラスラそれが読めたという。

町の人は、町の賑いについている。

「観音坂にはチャブ屋、仲通りには芸者置屋、待合と見番、そしてこのあたりは西洋家具の指物師、塗師、挽物師、鍛冶屋とか銅工屋(ブリキ屋)、椅子張りのバンコ屋、運送の軒子、西洋洗

●地区編●第六章—元町・石川地区



元町の通り(大正初期)——英文の看板が見える。正面は増徳院、現在の1・2丁目

濯屋、Yシャツ仕立などが軒を連ねていました。

本通りの方には、道具屋（西洋家具）、唐物、水菓子（果物）、西洋仕立、生菓、それに鳥肉屋、牛肉屋、時計、絵葉書、牛乳、パン、洋酒、毛皮、靴屋などがありました。

家具屋もありましたが、今と違って、家具屋というのは家庭用品の鍋、釜や皿のたぐいを売るので、タンス、長持、鏡台、そして洋家具を売るのは道具屋というんです。昔は、きっちりと区別がありましたね。でね、この店というのは、土蔵造りで、一見、店の中が暗く感じる、そんな明治の名残りの店構えも何軒ありましたね」（元町有志座談会）

「東京から宮様がわざわざ見に来たという中坪という洋傘屋、山手から毎日降りて来た外人用に、西洋菓子をつつ二つ箱にして売っていた喜久屋、この店は大正の頃では珍しかったキャフエテリア方式でした」（同座談会）

「それに外人のご婦人の着る衣類でネマキ屋、舶来のオモチヤ屋、そして、街頭にはロシア人の勲章売りもいました。クリスマスに使われるモールやジンゲルベルの飾りものを売る装飾屋、これらはほかの商店街にはないので、珍しい品物がたくさん置いてありました。

それに一丁目の外人墓地の下には、関内の外国人居留地の商館番頭などのために、弁当の運び屋の溜り場があって、毎日十一時

になると、三、四〇台もの弁当を積んだ箱車がいつせいに居留地めがけて走り出すんですが、そんな商売もありましたね」（同座談会）

また震災前までは、二丁目の代官坂にはジャーメン商会という西洋系や日本系の切花、鉢物の店があり、外国人を相手の商売が繁盛していた。圃場は、いまの本牧二丁目にあった。

「五時頃、もう片影が出来てから、橋際の領事館を出た。れいすや、真珠の飾屋、貝類、魚眼細工、絵葉書、写真、びかびか光らせた真鍮道具、塗器、女服の仕立屋、西洋家具などの並んでいる街の間を、元町停留所の方へ歩いて行った。その狭い往来に群がり、目のさめるような流行を街一杯にひろげていた」（有島生馬『嘘の果』）

「本通りの商店の人びとは、全員英語が出来たわけではありませんが、完全に通じなくとも身振り手まねで、せいぜい片言の横浜英語を使い、結構意味を通じさせて、それでも通じ合いました。まあ、心臓強い商いですね。結局、そういう人が今日の元町商店街の基礎をこしらえてくれたんだと思います」（元町有志座談会）

今日の元町は、この伝統ともいえる国際的な雰囲気そのままの型で伝わっているといえよう。

●大正活映——エキゾチズムに彩られる華やかな元町のうら、そこは山手の緑が迫っていたが、水屋敷の跡あたり、そこに大正九



『犠牲の淫』の一場面（一九二二年）

年（一九二〇）四月、大正活動写真株式会社、通称大活（大正活映株式会社）が設立された。総支配人は栗原喜三郎（トーマス栗原）、文芸顧問が谷崎潤一郎という顔ぶれであった。第一回作品が谷崎の原作「アマチュア倶楽部」、事業は第四回作品の谷崎脚色「蛇性の淫」で終ることになるが、資本出資関係者の東洋汽船会社が投資の緊縮を行い、十年十月には負債を残して、本社を東京京橋に移すことになった。

ここからは、後の映画監督の内田吐夢、二川文太郎、井上金太郎など、俳優では、高橋英一（のちの岡田時彦）、渡辺篤、江川宇礼雄などの俳優が育ち、それぞれ活躍した。このわずかな期間ではあったが、元町にも近代的な企業が芽ばえたのであった。

巖島神社わき隣、山手のがげ下に花街ができたのもこの頃であった。これに対して石川町の場合には、もともと地蔵坂が交通の要所であるのに加えて、中村川や堀川などの舟運の要所としても、新しい機能をもつ町へと変化しはじめていた。

●商人と職人の町——元町は、表通りが国際色あふれる商人の町であるのにたいして、裏通りは職人衆の町であった。この形態は、はっきりとした街並みに現われていた。細長い町域には九軒の家具屋があり、いずれも間口七間程で二階建、土蔵造りの堂々とした店構えであった。九軒の家具屋のうち五軒は、本村当時から土着の人びとで、いわゆる旧家で老舗であったといわれている。

表通りにたいする裏通りは、普通仲通りといわれ、その仲通りの後ろが仲々通りといわれたが、その辺一帯が職方の作業所であり住居であった。そのなかには「家具を作る指物師が二四、五軒もありました。家具屋と職人さんがよく目についたものです」（元町有志座談会）

大正から昭和初期の元町商店街の営業時間は、そのほとんどが朝の六時から夜九時までで、休日は毎週の金曜日、それと正月の三日日であった。

職方は一年中朝七時から日暮れまで、盆と暮には夜九時まで残業で、休日は毎月一日と一五日であった。

「元町の仲通りの朝は、たき火の煙で始まるといわれた。毎朝六時頃になると、ところどこの軒先から、きまつたようにもうもろたる白煙が立ち昇った。木部の接着に使う膠（カキカ）を沸かすたき火の煙が、指物師や木地屋の朝仕事の取っ掛りの一つであった。蟬（せみ）時（とき）雨れの夏の最中、たででさえ暑くてやり切れない時でも、あちこちの小さな工場から絶え間なく聞こえてくる「ぎっこ、ぎっこ」の木挽の音、ひとしお暑さの募る思いがしたもので、これも元町風物詩の一齣であった。

元町の自然地形は、南側には山手の丘がぎり立っていて、仲通りも仲々通りもその下にあり、そこには大正の頃でも家具製造の工場がいくつが残っていた」（吉田民蔵『元町古今史』）

●ハイトリック式——「元町の家具は、洋家具は長須さんで五丁

仲通りの風景——かつて西洋家具の市場がのきを並べていた、いまおもかげはない



目にありました。三丁目の松浦さんは今のむつみ木工所に工場がありました。つき当りに浜鉄工場もありました。昔は椅子と家具とわかれていましたね。いわば専門別というところです。『ハイトリック椅子』を作ったのは松浦さんです。後藤さんは椅子専門でした。後藤さんの一番弟子の松島さんが五丁目到现在も健在です」(元町有志座談会)

このハイトリック式という椅子は、器用な元町の家具職人の発明であった。

「椅子屋の松浦さんは、いままでの椅子を改良してガチャガチャガチャと押すと上に上り、心棒を押すと下ったり、後ろに倒れたり出来る椅子を作りだしたんです。これがハイトリック式というのです。その椅子を明治天皇に献上するために皇居にまいりましたが、その時、坂下門の所で番兵になにか注意を受けたそうです。それ以来、おかしくなり、倒れて亡くなられたということですね。

その椅子屋さんは、震災前まで三丁目に店があったが、震災で焼けてしまいました。今でいえば、それはちょうど理髪店の椅子のようなもので、高価なもので肘掛けの先にライオンの顔の彫物(彫物)がしてあったのが特徴でした。彫物といえ、元町には三軒ぐらゐの彫物師がいましたね。ライオンを彫ったのも元町の職人たちでした」(元町有志座談会)

●分業――家具が次第に高級化し、あるいは量産されていくと、

もはや単一の家具職だけでは無理となり、分業化してゆき、それが専門的な業種となった。すでに大正初期には、それらが完全に專業化していった。

專業化の原型であった下職といったものは、一三職であったというが、大きく指物師、木地屋とに分けられていて、それぞれ分業化されていた。これらは、大正期で二五軒、仲通りに多かった。そして、いずれかの店の系統に属していた。

表通りの家具屋(店)と職方とは、共同連携であった。家具屋は製品の発注者で販売者、職方は製造者であったから、当然双方は緊密であった。家具店は「お店」と呼ばれていた。もっとも一般にはお店は、いわゆる得意先のことをいったもので、家具関係も例外ではなかった。その関係は、地元の人々の座談会によれば、あたかも「親子の間がらと同じ関係であった」という。職方はお店の仕事となれば誠心誠意の仕事をしたものであった。お店以外発注があった場合には、必ずお店の了解をもらった上でなければ決して仕事をしなかつたという。お店の仕事で、お客様やその他へ行く時や、お店へ行く時、またお店で何かおめでたとか不幸とかの人寄せの多い事が起きた時などには必ず印袴(いんばつ)を着て、お店へ行くならわしがあつた。そして、職方の中から一人気のきいたものを選び世話役とし、お店や職方に何か事が起きた時には、伝達、手配、処理の一切を引受けていた。

これに対してお店の方でも、下職の仕事の手空きの出ないよう

に心配りをして次々と仕事を出したり、仕事中の品があれば、仕上り品とみなして支払うとか、材料購入とか何かで金が入用になつた場合には「前貸金」などで資金の援助をし、返済は何回かに分割し、毎月の仕事の仕上り分から差引くなど、お店と職方とは温かい血のかよつた具体的な同心的な結びつきをもつていたのであつた。

こうした結びつきは、また盆、暮の年二回お店から職方へ印綽天を仕立代と手ぬぐいを添えて配つたりした。この印綽天は本店であればあるほど着ている職人の誇りであり、名譽でもあつた。

●氣つぶ——職人の町元町には、職人としての氣つぶといつたようなものがあふれていたという。

「仕事が終わると、金の鎖の金時計を幅広い帯にはきんで桐^{きりぎりす}の下駄で日本橋へとくり出す。しかも江戸ッ子のように宵越しの錢は使わないといつたような氣風があつたといひます」(荒井正治氏手記)

●芸達者——それに当時の職人衆は、長唄か常磐津^{とくわい}のいづれかは誰でも知っていた。そのどちらかを知らなければ話にならないというのが元町の職人であつた。

「元町には旦那、親方連中で『ろの字会』というのが明治から昭和初期までありました。これは呉服、道具、経師、指物塗師、ブリキ、ペンキなどの親方、旦那衆で構成されておりました。縁日や祭りの時は必ず出演、それはもう芸人顔負け、実に芸達者ばかりでした。常磐津、長唄はもとより、茶番なんかも得意でした」

(前掲書) という。

こうした雰圍気のなかに、元町四丁目の表具師坂巻菊次郎の弟子のうちには、若き日の清元志津太夫(人間国宝)がいた。

「志津太夫は、私とは同じ釜のめしを食つた仲ですが、仕事が終ると二丁目の代官坂横通りの清元延寿太夫のところへ清元を習つていました。おけいこの休みの日は、前田橋の上や横浜公園で、ひとりで練習していました。いい声でしたね。あの人が仕事から帰つて来る時は、すぐわかりました。そのいい声でうなりながらですもの……」(元町 坂巻吉之助氏談)

いまも町の人々が集まつて「浜友講」という講が作られ、毎年八月一日には必ず大山阿夫利神社に参拝している。終戦の年にもやめることなく、現在通算八〇回をかぞえるというが、型を變えてつづいている。

(2) 震災復興

●無惨——震災直前の元町は、一、二八戸、人口約六〇〇〇人、震災のひとゆれによつて、がけくずれが続発し多くの家屋が埋まつた。なかでも一丁目の増徳院のうしろの高き三間の石垣は全壊、見晴しのよい百段もくずれ、その真下の数十軒の家は埋没した。四丁目の大神宮もがけがくずれて一〇余間も押し飛ばされた。建物はことごとく倒壊、火災となつた。主な建物では横浜高等女学校、大神宮、増徳院が焼失した。この町の圧死者、溺死者

ともに四五〇人を救えた。

一方、川治いの石川町には商店が多く、山ぞいの石川仲町には通勤者や労働者の住宅が多く、戸数は両町で一、九七三戸であったが激震によって両町の建物は瞬時に全壊、半壊ののち、中村方面からの火で全町焼失した。石川仲町では、元町と同じくがけくずれがいたるところに発生、三丁目の場合、延長七〇間（一二七・三メートル）のがけが一挙に崩れ、約二〇戸が土砂に埋った。一人八人が無惨にも生き埋めとなった。

人々は中村町や、根岸方面へと逃げていったが、石川仲町一丁目と二丁目の間の大丸谷にはすこしばかりの空地があつて、逃げおくれた数百人がなだれ込んだが、火勢はそれも襲った。がけを登ろうとしても、倒れた高屏が道をふさぎ、絶望となったが、そのとき二人の若者によって血路が開かれ、ようやく安全地帯に逃げのびることができたこともあつた。しかし、五〇人ほどの人は、ここで亡くなった。いまそこには地藏尊が祭られている。

船で川筋に逃げた者もあつたが、溺死する人もいた。この両町での犠牲者は四五〇人に達した。

震災後は、石川仲町には掘りぬき井戸がいくつあつたので、飲料水を求めて人が集まり、焼跡にバラックを建てる者もあつた。四日目には、十数軒となった。（『横浜震災誌』より）

●火災―震災の惨状について、外国人の貿易商は、次のように記している。

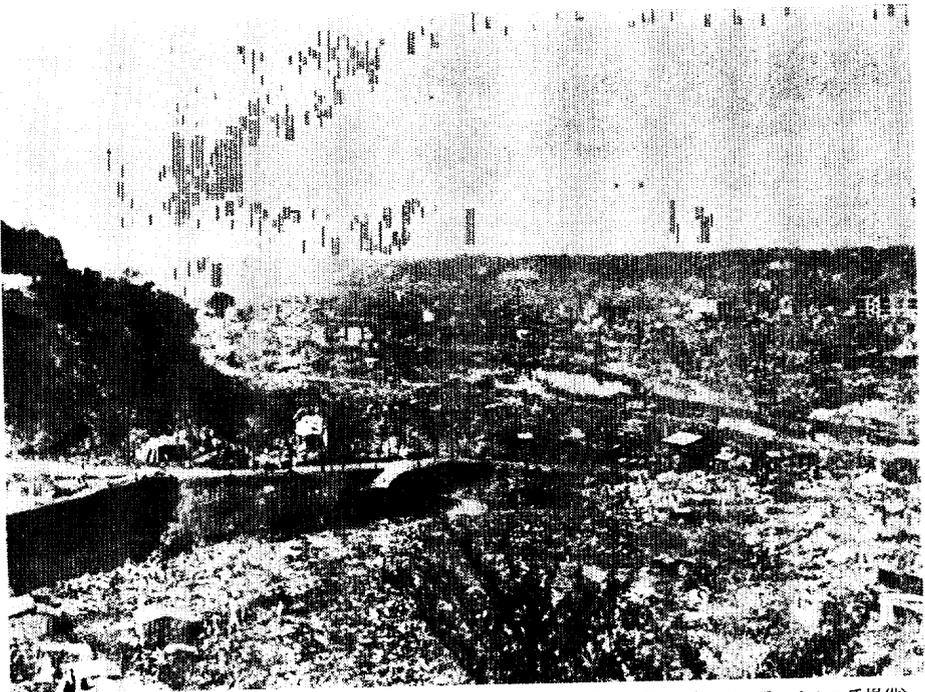


震災地蔵を建立したときの記念（落合辰五郎氏提供）

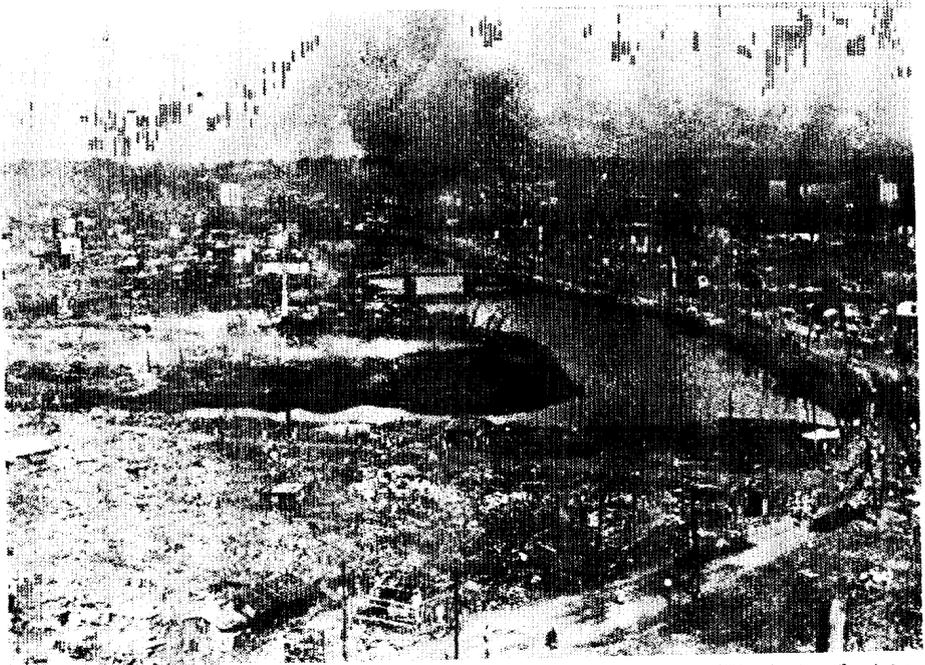
「……しかし、何にもまして元町の状態は悲惨であつた。そこは、ウィーラー博士の家の下のお寺のところまで、細長い町全体にわたつて、見分けもつかないほど、もつれたマッチ棒のようにベシャンコになっていた。楽しい、表のあいている現地人の商店の並ぶ長い道路は、もう消え去つていた。その道路のあつた場所は、家々が道の両側からいっしょに倒れて、重い瓦や裂けた木材の山になっているがらくたのところに、道路だけがV字型にへこんでいることであらうじて識別できた（略）……火が突然吹き出して、赤茶けた炎が薄気味悪いつむじ風となって空へまい上つて



大丸谷の震災地蔵



震災で荒野となる——坂は地蔵坂、手前は現在の石川町3丁目、川の向うは関外〈スタンチ・サカエ氏提供〉



——派大岡川と中村川の合流点、右端は西之橋、手前は現在の石川町、対岸は関内と関外〈スタンチ・サカエ氏提供〉

いくのであった(略)——あつという間に、倒れた木造の建物に火がついて、新たな炎が大草原の火のように私たちに向って走ってきた(略)……約四分の一マイル歩いたのち、私たちは、山手のずつとはずれたところの、神社がひとつと、伝統のある茶屋一軒がある浅間山から下方の第二の橋の対岸にある元町へと百の階段が急角度で結んでいる、見なれた地点にたどりついた。階段と、それがついていた崖の半分はすでになく、くずれ落ちて下の家々をおおって見えなくしていた。日くるめくような傷跡と、ひとつの土の小山だけがその地点に残っていた。火はなおも私たちの足元をなめるように追ってきたので(略)——(O・M・プー、金井圓訳『古き横浜の壊滅』)

地震の後に出火して壊滅した元町の惨澹たる状況がよく分かる。

●状況調査——震災から約二カ月後、元街尋常高等小学校の山内校長は、被災学区内の職員児童の罹災状況、市民の戸口などの調査を市長から命令されて、その結果を報告したが、「焼土ト死屍ト食滓ト屎便ノ混和セル一種ノ悪臭」は板がこいの小屋の集まりに充滿していたと述べている。

小屋は谷の奥や丘のかげに秩序なく並び、一つが三、四畳敷程でそれに十数人が雑居していた。

●元町復興——しかし、こうした惨澹たるこの地区では、町の人々の復興への努力が始まった。

「震災後、元町では繁田五郎、中瀬清吉、大河原芳五郎、打木三郎、池谷正雄ら町民を役員とした『元町再興団』が組織された。事務所を増徳院の境内(のち飯小屋に移る)におき、元町復興にほん走した。配給品を配ること、町民の散逸を防ぐことなどを仕事とした」(『震災記念元街小学校復興資料』)

罹災後、県によって共同バラックが五丁目建てられたのをはじめ、九棟のバラックが建てられた。十月中旬、四丁目に飯小屋の公衆浴場が井戸水を使って開設された。入浴料は実費で三銭であった。翌年三月に私設の浴場が開業されるまで使われた。バラック建の店ではじめて商売したのは四丁目の藤田伝吉で、日用品を販売したのがはじめとなった。

元町町民は十月には一〇戸、十一月には二〇戸と復帰したが、十二月には谷戸橋、西ノ橋、前田橋の仮修理が終ると、元町への復帰も急増し、この月四三戸、翌年の二月以後は一〇〇戸、二〇〇戸とふえ、八月には二二八五戸と、ほぼ罹災前の戸数に復帰したのであった。

しかし元町における商業力の復興は、近隣の関内、山手地区の壊滅によって、また一時的ではあるが外国人の本国への引揚げや、神戸などへの移住が大きく影響して、「大震災後も、ほとんど復興せず、戦争が始まるまでにやっと半分くらい復興した程度であった」という土地の人もいる。

「元町は関東大震災のあと、横浜で一番早く表通りを舗装しまし



青年会による罹災者への物資配給(栗原英子氏提供)

た。これは試験的に行われたもので、「網道式」といって特許だったそうです。地震に強いようにと、地面に金網を敷き、餅網を大きくしたようなクリップ網です。今でも道路工事の際には当時の金網が出てくる場合があります。この間も下水道工事の際に出てきて見ました。よく考えたもんですね」（元町有志座談会）

●青年団の活動——そして、石川町や石川仲町では、石川一／三丁目の石川東部青年会、五／七丁目の五・六・七青年会が町の復興の主体となった。

青年団は焼跡の整理に、バラックの建築に、配給品の配給にと目ざましく活動した。罹災直後、早くも三／四〇戸ができたが、十月には二〇〇戸（八〇〇人）、十二月には九〇〇戸（三、五〇〇人）のバラックに町民が収容された。この頃になると夜間に電灯がともり、罹災前のような明るさを取りもどした。地藏尊や不動尊の縁日もこのとき復活し、罹災時のゆううつさを吹きとばすようであった。

しかし、町民のなかには罹災により死亡、または帰町できなかつた人々も多く、戸数は震災前の四〇パーセント減の七三〇戸となった。

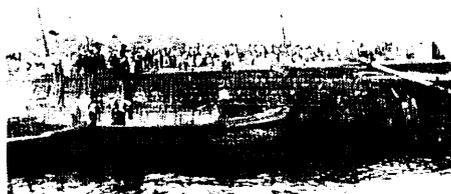
震災の復興はおいおいに実施され、居留地の外国人も帰ってくると、元町は再び国際的な商店街として再生してきた。ただ、蔽烏神社わき隣りの二業地は再び復活することはなかった。昭和五年（一九三〇）、見番も廃止されてしまった。



青年会の消火活動〈栗原英子氏提供〉



罹災児童の天幕授業——石川小学校、焼け跡に天幕を張った〈栗原英子氏提供〉



罹災者への給水——だるま船で川から給水、川岸には海軍の救援隊がいる、石川町川岸〈スタンヂ・サカエ氏提供〉

●白系ロシア人——元町には、各国人が住み、そして暮らしていた。もとより貿易商の外国人が多かったが、なかでも亡命して来たロシア人が多かった。昭和初期、ロシアパンがかなり売られたというが、これらは外国人自らの生活のためのものであった。外国人が暮すには、元町は便利な土地であった。亡命ロシア人の中で、日本のバレエ界を育てたナターシャ・パヴロワ母子が買物にきたのを見たという人もいる。

「昭和三、四年から蒲田の撮影所で、『広瀬中佐』という松竹の映画をとりましたが、そのとき元町の亡命ロシア人がたくさんエキストラとして使われました。外国人配役以外に外人をエキストラに使ったのは、日本映画史上最初だといっていました。」

亡命のロシア人が私の家（酒屋）へ、ギター片手にたどたどしい日本語で流行歌を歌ったり、ロシア民謡を歌ったりしていました」（元町有志座談会）

●打越——震災復興計画は、この地区に大きな変化を与えた。麦田トンネルの増設（第八章、本牧地区参照）と、車橋わきから山元町まで、打越の丘を南北に削りとって、切り通しにし、昭和三年八月、その道路に山元町を終点とする市電が開通した。

切り通しには復興事業の一つとして打越橋がかけられ、山手と南区唐沢方面とを結んだ。掘削にあたっては多くの困難があったが、地元の人々は言う。

「山下公園が大震災のがれきりで出現したとはいえ、その上土は、

この打越切り通しの造成の土を運んだものです。打越住民百数十軒の人が立退きの犠牲にあったことを、五十年を経た今日、この事実を知る人は少なくなつたでしょう」（石川・打越有志座談会）

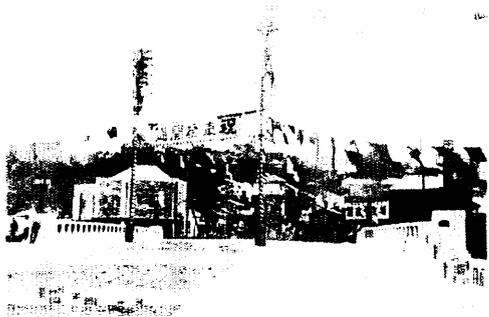
トンネルと市電、この二つの交通の整備は、地区にとって画期的であった。山元町停留所を拠点として、伊勢佐木町、日ノ出町へ買物やレジャー、山手、平楽、唐沢そして根岸への交通が一段と便利になった。その上市電の開通によって西竹之丸、大平町方面へ住宅地域が拡がっていくことになる。

「夏はこの辺に住みたい。私はそう思いました。漆黒の色にこんもりと茂った森と森との間から、きらきらと息づく街の灯が見えます。大きい建物の赤い広告の光りは強過ぎていやだと思えますが、そのほかの小さい落付いた色の『街の灯』は涼しい感じがします……」（山本禾口『横浜百景』）

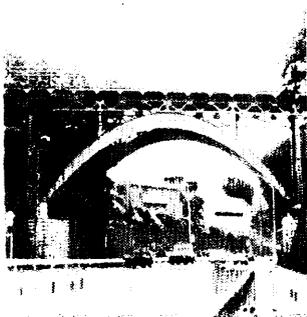
打越の周辺は、ここに新興住宅地として発祥することになった。これにともなつて、車橋周辺の石川町五丁目には、在来のお舗のほか新らしい店も出来ていった。石川町では部分的な土地に賑いが始まった。

●地藏坂すたる——道路交通の整備は、こうして地区の発展をうながしたが、反面では地藏坂の交通量は次第に減少していった。特に荷車や馬力車が貨物自動車にとつてかわつていく昭和初期になると、地藏坂の交通はかつてのおもかげをなくしていった。

一方、「大正震災を一転機として、新山下町の海岸道路が拓



車橋開通（昭和3年）——橋の向うは石川町五丁目（高田重次郎氏提供）



打越橋

け、元町のトンネルが掘削されてから、地蔵坂に対する関心は、捨てられた花の如く萎んで行った。無心の坂にも文化の疾風は吹く。開港以来人馬の汗の滴り、幾春秋を澆刺と生きて来た由緒の交通路も、今では坂の上の消防署の自動車がい出しやうにサイレンを響かせる以外は、百年前の閑寂な土に還っている」(前掲書)

震災後の復興は、官民一体の努力がこの地区においても行われ、昭和四、五年になると今までのように、元町は外国人相手の商業地として、石川町は住宅地として復興した。

●中央教材園——さらに、この地区の外周部には、震災復興事業で今までなかった施設が自然の地形を利用して造られた。一つは、横浜市中心教材園、もう一つは元町のプールであった。

前者は昭和四年(一九二九)四月に、震災復興事業の一環としてこの地に移転してきたもので、横浜市の学校教育の理科教材(生物)を栽培、展示して、生きた教材を提供するものであった。

その後地道な活動が続き、市内の小・中学校に植物教材を配付、海辺性植物の栽培、カエルの人工増殖など多角的な経営を行った。鶴見区の高校教師宮代達雄が永年に亘って採取した日本全国の腊葉標本推計六・七万点、鳥類の標本三〇〇点などの寄贈を受け、これの整理保管に当った。

この教材園のようなシステムを持つのは、昭和三、四十年代には全国にただ一つのものであった。ただし、この施設も昭和五十

四年六月発展的解消、保土ヶ谷区権太坂上の「こども植物園」に変わった。

●元町プール——元町には、元町公園の一角、もと水屋敷跡の位置にプールが建設された。このプールは、横浜市青年団連合会が希望し、各青年団からの拠出金によって市が建設したもので、五年(一九三〇)六月一日に開場した。式後、極東オリンピック大会で来日中のフィリッピンの選手と日比対抗の水泳大会が行われ、横浜市の最初の国際的水上競技大会となった。

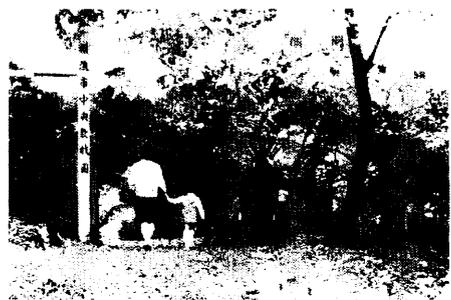
そして七月七日には日本初の夜間水上競技会が行われている。太平洋戦争まで夜間、横浜五専門学校(横浜高工、横浜高商、Y専、関東学院高商部、横専)の水泳大会の場として賑わった。

このプールは、五〇メートル公認プールで、一二メートルの飛び込み台が設けられた。完成後は市民大会をはじめ、県下の各大会にも使用された。「特にこのプールでは、全国にさがけて夜間競技も開催できる夜間照明施設が設置されたことは、まことに斬新、画期的なものであり、夜間の市民大会は全国でも神宮プールと元町プールより他になかったのである」(『神奈川県体育史』)さらに、昭和六年二月にはプールの裏手の丘の下に、射場一五間三尺(二七・八メートル)、四二坪五合(一四〇・四平方メートル)をもつ横浜市営の元町大弓場が建設された。弓道の普及と発展をうながすためのものであった。

これらの施設は、元町にとっては近代的な公共施設のはしりと



中央教材園の全景——〈相沢豊利氏提供〉



中央教材園の入口〈相沢豊利氏提供〉

なった。

●大丸谷——石川町の復興は着実であったが、それにもなつて大丸谷（現、石川町二丁目）には、まとまってチャブ屋も復興した。

もともとこの地のチャブ屋は、明治二十五、六年ごろに本牧、北方、根岸に集団をみたチャブ屋とおなじく営業地となり、主に外国船の下級船員を客としてむかえていたところであったが、チャブ屋は、その入口に商店が多かつたほかは、地元とは直接的なかわりを持つことなく、独立した区画をなしてた。

昭和八年頃の地図によれば、その軒並みは画然とされていて、一二軒のホテルが見られる。ニューヨークハマ、カマクラ、キミ、パナマ、旭館、ジャパン、ミウラ、ミネ、東京、ホネムーン、サイ、デユクスの各ホテルである。このなかで建物として大きいのは、ジャパン、東京ホテルなどであった。

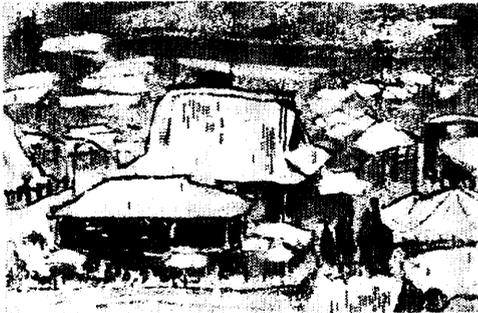
作家平野威馬雄は次のように記している。

「石川仲町一丁目と二丁目、元町のトンネルを前田橋から見た右の太古角兜型の赤青薨のピラミッド。高爽な坂路に沿つた別世界閑静で眺望の佳いホテル街。ホテル数十軒で女は六十人程。代表的なのはサイ。ジャパン。ミネ。デユクス。朝日館ホテル。三浦ホテル等。ここでは外国船員などが歓迎される。そのせいか本牧に比べてやや寂寥の気分がある。特長はゴタゴタしてゐないで寧ろ清遊に妙だと云ふ。……………」

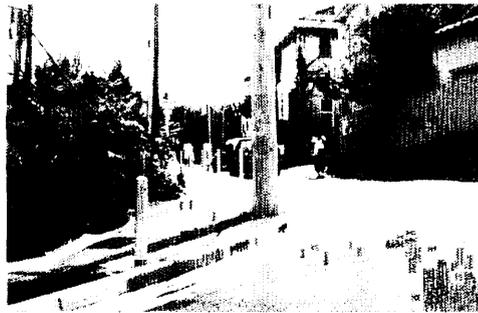
組合幹部連中が今盛んに本牧の隆盛を大丸谷に移すべく繁栄策を練つてゐる。従つて、もうやがて茶坐屋と云へばホンモク……ホンモクと云へばホテルの偏頗な連想は大丸谷の近代的な進出と、打つて一丸とされる事と思ふ」（平野威馬雄「ちやぶや由来記」『中央公論』所収）

この大丸谷は、結果的には本牧をしのぐことなく、戦災は一部の焼失のみで免れたものの、昭和三十四年売春防止法によつて消滅することになる。

この狭い元町・石川町地区のなかにも、震災を契機として、さまざまな変化を来たした。この地区も時代の流れのまにまに昭和



昭和初期の大丸谷風景（小島一翁氏画）“横浜百景”より



大丸谷坂

に入っていくのであった。

(3) 下町として

●川岸では——震災から昭和の初期にかけて、中村川の川岸の通り、亀ノ橋を中心に問屋の町ができて上っていった。舟運が物資輸送の大きな力となった。

町の人はいう。

「亀ノ橋わき、もとの鶴屋呉服店の跡から一丁目に向っては、洋服の生地、既製服の間屋が多かったです。ほかに乾物屋、米問屋ですね。米問屋なんぞは、朝になると馬力がズーッとあの通りに並び、小売店へ米俵を運んでいったもんです。

いまでこそ、川岸は普通の商店ですが、復興後は大店がずらりでしたね」(石川・打越有志座談会)

「洋服の間屋というのはね、アメリカの古着を扱うんですが、いつも山のように積まれてましてね。小売屋にはハンガーにいっぱい吊り下げられてました。外人の古着だから日本人の体格に合わない。それで日本向けに仕立直しましてね。これで洋服直しの店もかなりあったんです。

古洋服は震災の罹災者に渡されたものがはじめだったようです」(同座談会)

昭和十年代川沿いには問屋筋の商店が並び、仲通りから山ぎわには住宅が並んでいた。

●荷揚げ場——石川町の商店にとって有効だったのは、中村川の存在であった。

「川のふちには、菓子屋、醬油屋などが多くて、谷戸橋から八幡橋まで帆かけ船が通ってました。橋の下を通る時は、長い棒で川底をついて動かして、沖に出してから帆を張りました。舟は月に一、二度、問屋さんの荷物を積んで出ました。町ごとに、川岸には今も残ってますが『荷揚げ場』ね、それぞれの店で『荷揚げ場』を持ってましてね。そこから品物の積み降しです」(同座談会)

「品物を降すときなんか問屋さんは大変です。毎日夜十時頃まで、時には徹夜でしたね。昔の商売は楽じゃなかったんです。子どもの頃なんですけど、石炭の積みおろしときには、石炭がこぼれるので、それを見ていてさあつと拾う。家に持って行ってお袋から小遣いをもらったりしましたね」(同座談会)

中村川や堀川などの川は、港から直接内陸に物資を運ぶことができ、埋地の問屋筋へ、さらには八幡橋方面へと、共に連絡できる大切な川で、川は石川町にとって特に明治、大正、昭和を通じて重要な産業の動脈であった。

「堀川は生活の上で一番の交通機関であったといえます。生活の物資は、すべてこの川から出入りしました。ずうつと行って港橋には魚市場、青果市場などもありましたものね。舟は指路教会の辺まで行っていました」(同座談会)。そして、その運河は、磯子から流れを発し、堀割川、中村川、堀川と川の呼び名が変わるにつ



川には船がもやう、正面は石川町駅のホーム



荷揚げ場 (石川町川岸所見)

れて、その川沿いの街のそれぞれ異っているのは面白い。

●仲通り―こうした川岸の間屋に対して、仲通りには生活必需品を販売する店が多かった。例えば牛肉屋である。

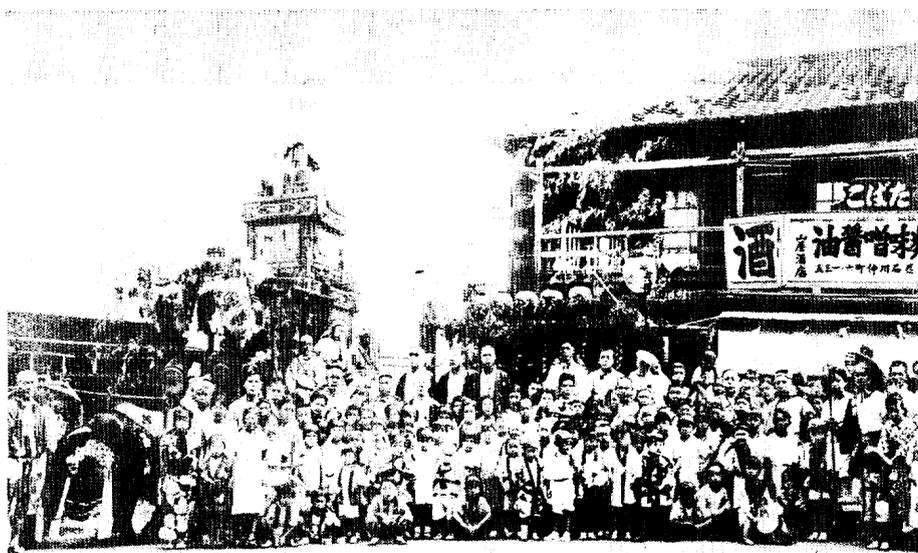
「牛肉では『川本屋』という牛肉屋が一番大きかったですね。石川一丁目で川の縁にありました。スキ焼を食べさせた大きな料理屋です。外にはちょうちんなどをつけて、雰囲気の大変良かった店でした。位置は現在の塚崎屋の隣りのところですよ」(石川・打越有志座談会)

町の人々にとって昭和初期のカフェーもよき思い出となっている。これはその一例である。

「石川町のほかの店は『梅月』(そば屋)、『松月』(菓子)、『中村屋』(牛肉屋)、カフェーの『トモエ』などでした。カフェー『トモエ』の女の人は白い前掛を着け、頭をハイカラにゆっていたのを覚えています。カフェーだったんですが、ここは『うなぎ料理』が中心でした。一晩行って一円五、六十銭から二円でした。花ちゃん、トモエさんと二人の女給さんがいました。

普通カフェーといっても、洋食屋みたいな感じで出前もしてくれました。ハヤシライスとかカレーライスなどもありました。『玉川』というカフェーにも女給さんがいて酒と料理が出ました。そこには蓄音機がありまして流行歌の『酒は涙かため息か』なんぞをやっていました」(同座談会)

●フクロウが鳴く―ただし仲通りの裏側、丘すその住宅地では



石川町の夏祭(昭和初期)―山車を引き終えて子供たちが商店の前に集る(高田重次郎氏提供)

町内会の役員揃って―商店が御神酒所となる(栗原英子氏提供)



まだ自然が満ちあふれていた。

「大丸谷の両側は、たくさん桜が植わっていて、花見ときには花のトンネルとなりましたね。それにこの辺にもオニヤンマやトースミトンボなんかがたくさんいて、よく採って遊びました。大雨でも降ると小さな流れがいくつも出来るんです。水車を作ってわいわいって遊んだもんです。けれどお稲荷さんの初午はつごの日が一番楽しかったです。朝早くからのぼりを立てて、太鼓を鳴らし、子どもたちには菓子がくばられましたね。

震災前、山の上に大きな樺カシの古木がありまして、夏にはフクロウが鳴いて、子ども心にとっても淋しかったですね。震災からは大木もなくなりましたが、山にはホーホッというフクロウの鳴き声だけはずうとつづいてましたね。

堀川には冬はカモメ、夏は銀ヤンマがスイスイと飛んできましたね。水がきれいだったもんで、九月中まで泳げましたが、あぶないって、そのたびに交番の高橋巡査に叱られて追いかけてまわされたもんです。川には大きなボラなどどんどん入ってきて、カニもいればハゼもいる。亀ノ橋の下水の排水口のところには、イナ、オボコ、セイゴがたくさんいました、そこでよく釣ったもんです。それから、ミルクホールもありました」(同座談会)

●戦時下——この地区も、こうした街並みに見られるように、昭和初期のいわゆる戦前のよき時代をむかえていた。しかし、庶民的な活気、下町の人情が充滿したこの地区にも、戦争への足音が

ひびきはじめていた。この頃から、おしなべてこの地区の特徴は失なわれていった。特に日中戦争から太平洋戦争に入ると、元町、石川町いずれもが戦争体制下に組み込まれることになる。

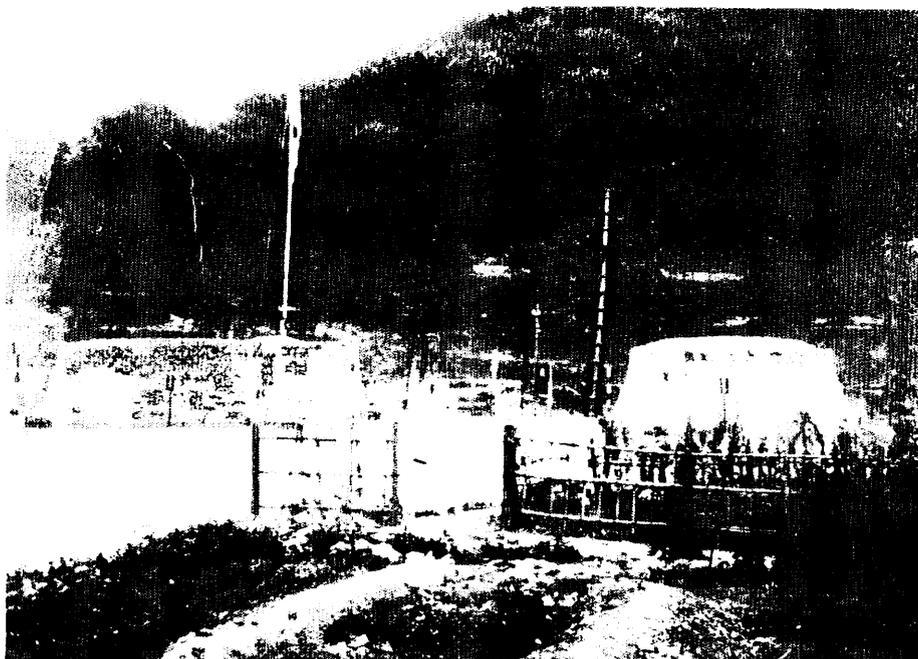
石川町や元町でも、山手の丘に町の人々の勤勞奉仕によって防空壕が掘られた。町の表情も変わっていった。

大丸谷のチャブ屋(大丸谷旅館組合)の場合も、十八年二月には十四軒の全店が、軍需工場の徴用工宿舎となった。

元町商店街の場合も「戦争中は商売にならず、ショーウィンドーに紙をバツ形に貼り、主人は新山下の方の軍需工場に勤めたりしました。どうせ徴用になるんなら、自分から行った方がいいという人が多かったんです……店の横文字の看板はもちろん、降したり消したりさせられましたかね」(元町有志座談会)という状況であった。そして元町プールの元町公園のまわりは、食糧増産の戦時農園となった。

●ああ由郎ちゃん——昭和十七年(一九四二)四月十八日、日本本土初空襲、京浜地方一三機来襲のうち一機が打越に來襲、幼児が銃撃された。本市第一号の犠牲者であった。その犠牲は中村由郎ちゃん(当時五歳)で、その兄は、その時のありさまを次のように述べている。

「当時私は石川小学校の四年生で、空襲警報が鳴り出すと急いで帰宅した。家では母と弟の由郎(五歳)が食事をしていて。打ち揚げ花火のような音が聞えたので、弟と私は外に出て近所の子にま



町内会で作った大型の防空壕〈田村伊作氏提供〉——全景、入口は爆風よけに岩を積みあげた

じり、県庁舎の屋上あたりから高射砲を撃っているのを眺めていた。私たちは、まだ空襲の恐ろしさを全く知らなかった。高射砲弾が破裂し、黄色い煙が激しく広がるようになったので家に引き返すことにした。家のちよっと手前の所で、黒い飛行機が一機、非常な低空飛行で上を通過するのを見た。変な飛行機だと思いつつ隣にいる由郎を見ると、由郎は突然後ろへ仰向けざまに倒れ、またすぐ起き上がった。しかし、また前へ崩れるように倒れてしまった。一瞬の出来事に、私にはどうしてそうなったのかわからなかった。由郎の後頭部から一筋の血が細く流れ出したのを眼にした。私は無我夢中で由郎を助け起こそうとしたが、重くてどうしようもなく、たまたまい合せた隣家の人に頼んで家へ抱いてきてもらった。

母親は驚きのあまり、ただ由郎の名を呼び続けていた。出血が止まらないまま、手拭いで結わいて亀ノ橋病院へ連れていった。治療の甲斐なく意識不明のまま息を引きとった。由郎を火葬にしたとき、遺灰の中に焼けた弾が出てきたのを覚えている。

現在、由郎の霊は平楽の増徳院に祀られている」（中村秀吉氏談『横浜の空襲と戦災・体験記』）

「前には、石垣に弾痕がありました。たしかに飛行機は港の方から低空で一機だけ飛んできたようでしたね。それで掃射をしたんです」（石川打越有志座談会）

鋭角的に切りとられていたという石垣の弾痕は、現在、風化さ



壕の入口部分、町内会役員の記念写真
〈田村伊作氏提供〉

れていて判らなくなってしまうている。

戦争下、当局による施策は、この地区にも及んだ。その一例として十九年（一九四四）六月、元町のプールは岸谷（鶴見区）、六角橋（神奈川区）、お三の宮（当時中区）とともに市民の心身鍛錬場となり、横浜水錬場附風見童水錬場と名を変えた。入場料おとな一〇銭、こども五銭であった。もはやプールはレジャーの場ではなかった。

●戦災——「戦時中、海軍の桜部隊がフェリス女学院にいました。プールの所の地下を掘って、軍需物資がおかれていました。終戦後は、そのために復旧が早かったです。海軍の部隊長は、進駐軍が来たらどうせ取られるのだからみんな持っていけと言うので、木材、トタンなどをプールの所の地下壕から取ってきただけで残っている人に配給しました。それで元町の人は物資を手に入れることができまして、この点たしかに運が良かったんですね……。」（同座談会）

戦争のうずのなかで、この地区も二十年五月二十九日の大空襲によって、元町の一部の、わずかを残してすべてが焼夷弾の雨にさらされ、道も丘も一切区別のつかない火の海となった。そして終戦。元町・石川地区は戦後を迎えるのであった。



空襲によって焦土となった元町——中央は堀川、右手の橋は前田橋、バラック数軒があるだけ〈荒井正治氏提供〉

第三節 ●ザ・MOTOMACHI

(1) さきがけ

●ドラム缶のお金——この地区は、戦災によって焦土となったが、幸いにも接収をまぬがれた。これはきわめて幸せなことであった。商業の街元町では、昭和二十年、占領軍の進駐によって、早くも路上で米兵と日本人との間に物々交換がはじまり、やがてアメリカ製の品物が町に出廻った。なかでも街娼が持ち出す布地やタバコは人気をあつめた。バラック建ての店では、外国人(兵士)相手の商売を始めた。

「戦後は、売れる物はなんでも売りました。それに、兵隊もよそで買物をするところがなかったせいか、兵隊の家族も一緒によく来ましてね。東京の築地や御徒町で仕入れてきては売りました。店も少なかったせいか、仕入れればすぐ、それこそ飛ぶように売れましたね。」

まあ東京上野のアメ横のはじまりのようなことをやっただけです。タバコ・衣料品というように、戦後の商売のはじまりでしたね(元町有志座談会)

「二十一、二年には、横浜興信銀行の元町支店には、一億円以上の預金をもってた人が十数人もいましたね。百円札の発行されたのですが、ドラム缶にギウギウウつめ込んで銀行に持ってゆく

んです。これはほんとうの話です」(同座談会)

●法要——一方、こうした外国人相手の商売が活況のかけで、石川町の蓮光寺では、二十一年(一九四六)五月二十九日戦災一周忌にあたり、久保山田覚寺など七カ所とともに戦災に遇った無縁仏のねんごろな法要が行なわれた。ついで、三周忌の「五千名の死者を弔う法要会」も蓮光寺で行われ、遺骨はのちに三ツ沢戦災者共葬墓地に埋葬された。

●商店再建——昭和二十一年、戦災に遇っても、元町に居残った人々は、早くも組織を作って、商店会組織の再建活動をはじめた。進駐軍や関係官庁との交渉連絡など、難航のうえに、二十二年四月一日、任意組合として元町SS会(元町ショッピング・ストリート・アンシェーション)が一五店によって結成され、二十五年二月元町商店街協同組合(理事長・高見保太郎)を結成。二十六年十一月には、SS会を発展的に解消し、元町商店街協同組合は協同組合元町SS会に名称が変更された。

戦後の元町は、こうした組織のもとに、それぞれの商店で進駐軍相手に、乏しいながらも国内の特産品を販売。さらに外国貿易が再開されると、輸入品を市民むけに販売することによって、内外の高級品販売の商店街として、その特色をもつようになった。

この結果、他の商店街からはうらやましがられながら、年商はこの頃数十億円に達したという。

●MOTOMACHI——しかし昭和二十七年(一九五二)、市



蓮光寺(石川町3丁目)



戦災復興後の店構え——看板には衣料品配給店と書かれている、石川町五丁目にて(小畑重蔵氏提供)

内の大半が接収を解除され、関内・外の商店街が復興するにつれ、客足は落ち、売上げは減退していった。このことは、当然商店街の大きな問題としてとりあげられ、次のような対策が進められた。

この年の八月には、当時としては画期的な、割引券（五～一〇パーセント引き）をサービスするSSセールを実施、十月には一丁目と五丁目の入口に、これもまだ他に例がなかったローマ字綴りの「MOTOMACHI」を圖案化したネオンアーチ二基を建設するなど、運動をくり広げた。

この町に次々とユニークな店ができていった。有名女優のひいきの洋服店、ハンドバッグ専門店など、流行の最先端をいく店が営業をはじめた。そして、かつてのおもかげの再来のように外国人が多数来店した。外国人は明治大正期で七割といわれたが、戦後は上廻って八割になったという。

もともと外国人相手の元町にとって、外国人受け入れは容易なことと日常のことであった。外国語のできる人達が多かったのもその原因の一つといえた。それに外国人の来客にたいする施設も積極的に考慮した。

「この元町では、商店の古い和式の便所を外国人がとても嫌うので、商店街で金を出し合い、水洗式トイレをつくりました。『浄化槽組合』というものをつくったんです。昭和二十五年頃の金で四千万円かかりました。まず戦後では早い方でしょうね」（元町有



戦後の前田橋（昭和20年代）——正面はもとの百段、岩はだがのぞきおもかげもない（横浜市図書館提供）

志座談会

●町内会組織——一方、町の組織づくりも、商店会の組織化に並行して行われたが、戦後、東部（二～三丁目）、西部（四～五丁目）の町内会が組織され、電柱・木材・トタン板など町の復興資材の入手などにほん走していたが、二十七年二月、この二つの町内会を合併して元町自治運営会を組織し、町の復興への努力が一段と加えられた。

自治会はのちに巖島神社の再建、神興舎みこしやどの建立、そしてその境内地には三十八年四月になると青少年ホールの建設を行った。

元町での古さと新しさの二面の復興がここに出来上り、やがて来る昭和三十年代の高度成長の波にのっていくことになる。



戦後の元町商店街（昭和30年）——WELCOM代の看板が目につく〈横浜市図書館提供〉

●三十年代——三十年代に入ろうとする頃の元町商店街は、表通りには一四四店、裏通り（山手より）には一〇二店、堀川沿いには四一店があった。これらの商店の業種はおよそ六〇種にわたっていたが、表通りの場合、外国人を対象とする商店は五九店、外国人と日本人半々ぐらいを客とする店は二五店、その他日本人専門店となっていた。なかでも、洋品・洋装店は一四四店の内三三店と圧倒的に多く、それぞれが外国人の趣向や体格に合う製品が陳列された。

それに戦前の関内のように書画骨董店が六店、貴金属店は七店あり、外国人好みの日本独得の美術工芸品、真珠、象牙細工などを販売した。さらに家具店は一〇店ほどあったが、これらの店のほとんどは裏通りの家具工場・塗装工場と直結した製品・価格であり、他の商店街の家具とは、品質においても比較にならないほど良いものであったという。

そして、川沿いには海運関係六店、発動機修理四店などがあって、船舶関係の職種が多いことが注目されていた。（『横浜市小学校社会科研究会報』第一〇号 一九五四年）

(2) 元町売り出す

●自然に恵まれて——こうして元町が売り出していく頃、昭和二十九年（一九五四）十一月には、石川町五丁目と中村町一丁目の商店によって石川中村勉強会が結成され、ついで石川町一丁目の



牛坂風景

商店街によって石川壱商業会が設立された。そしていずれも売上げを伸ばしていったが、このことは元町の好況に刺激されたものであったといえよう。

しかし一方、打越方面の丘には昔ながらの坂が残り、山手からつづく尾根へは遊歩坂などによって結ばれている。猿坂は別名モンキー坂と呼ばれ、坂の入口に猿を飼っていたこと、牛坂は牛が登り切れないので苦労した坂としてその名の伝承がある。

反面この地区はまだ自然に恵まれている。前にも述べたように、船舶給水の供給地の名残りが切り通しの一角に発見されたが、自然の湧水が別の所の道路わきに露呈している。霊泉といわれているものがそれで、地元の山本・前打越町内会長によって四十八年二月碑が建てられた。碑文には、安政開港の時の出入船の船舶給水に使われ、震災そして昭和二十年五月の空襲の際にも、市民がこれによって救われたと刻まれている。この地域の自然条件の一例である。

区内のなかでも、山手の丘の地つづきとして、比較的自然に恵まれているこの打越に、四十年代、こともあろうに打越橋から下の道路へ投身自殺する者が数名出るといふ事件が発生した。昭和四十四年六月、地元町内会や中区連合町内会長連絡協議会の要望により、区役所によって、橋の両側の欄干に高さ二メートル余の防護の金網が張られ、投身防止を図ったのである。金網には銅板のプレートが張られている。

「すべての重荷を負うて苦労している者はわたしのものにきなさい。あなたがたを休ませてあげよう イエス・キリストは云われた 共立聖書学院」

だが丘を持つ不便な土地にも、住宅化はすすみ二十年代後半には、ほとんどの丘という丘には住宅がひしめいて建てられるようになった。

●石川町駅——一方、三十九年（一九六四）二月には懸案の国鉄根岸線が開通し石川町駅が開業された。駅は堀川をまたいでつくられた。これは中華街と元町との連携を考慮に入れたものであった。今まで静かだった石川町も、駅の新設によって、にわかには活気を取りもどした。特に元町寄りの石川町一丁目は、元町商店街からの影響をうけて、かつて無かったモダンなデザインの店構えを持つ飲食店が多くつくられるようになっていった。

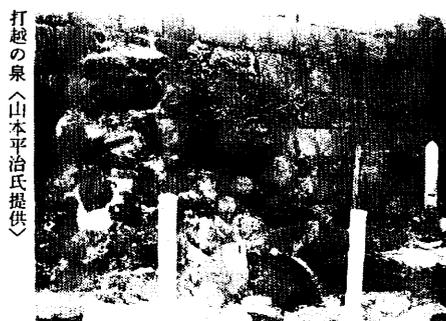
地元の人は次のようにいう。

「石川町駅が出来るまでには、いろんなことがありました。設置の陳情を盛んにやりましたよ。駅名ひとつ決めるのにも、いろいろともめたもんですよ。」

昭和三十六年頃には鉄道当局からは『山手町駅』、外部の団体からは『港横浜駅』とかいろいろなることをいつてきましたけれど、そんなバカな話があるかい。石川町の中に駅が出来たのに、わざわざよその名をつける事はない。石川町だから『石川町駅』でいいじゃないかと、私達住民は主張したものでした。ですから



石川町駅



打越の泉（山本平治氏提供）

駅名は住民の意志で決定されたといえますね。開通は町内会全員の念願でしたが、その日をまたずに亡くなった町内会役員や、たまたま開通式当日に交通事故にあつて亡くなった役員もあつて、まさに涙の開通式でした。未亡人はご主人の写真を抱いて開通式に列席されましたね……。

計画から開通までの間、公共事業の犠牲となられ、立退きの方は根岸の方に行かれましたが、私達の街の繁栄の功労者として町内会では永久名誉町内会員とすることに決議して、毎年の敬老会、お祭の時など、必ず招待しておりますよ」（石川・打越有志座談会）

●クリスマスセール——この地区に三十年代高度成長経済政策の影響が現われるのは、三十九年国鉄石川町駅ができてからで、四十年代に入るといっそう顕著になってきた。その直接的な恩恵を得たのは元町で、この商業活動はますます活発化してゆくことになる。その手始めともいえるのは、三十九年の歳末のクリスマスセールであった。五〇万田進呈セールで、サンタクロースの仮装をし、ソリを型どった自動車に乗り、福袋をつめ込んで路上を走るといったアイデアがうけたことであつた。

●ヨーロッパフェア——三十年（一九五五）四月には外人客の誘致を目的とする英字パンフレットを作成、駐留軍兵士とその家族のために「ウェルカム」の張り札をそれぞれの店頭にはり出し、英字の電話帳にも広告を掲載するなどの企画を実施していたが、こうした活動を皮切りに、三十・四十年代には、内外人を対象に

し、さらにつぎつぎと企画を打ち出した。販売方法では、当時としてはあまり出廻っていないテレビ、電気冷蔵庫、洗濯機などを賞品とするサマーセール（三十一年七月）、結婚適齢期の人々が多いの見込んで、日本航空とタイアップした香港・台北旅行などを賞品とするウェディングセール（四十二年四月）などを行い、その間には当時珍しかった英和文でビニール製の店頭幕で宣伝したり、チャールミングセール（三十七年二月）と銘打った売り出しも行われた。また、この頃、俳優の山村聡、草笛光子、タレントの芳村真理出演による、フジテレビの小川宏ショーでの放映など、大いにマスコミを活用し宣伝した。



元町を空から見る（昭和36年頃）——川は堀川、橋は手前から前田橋、谷戸橋、川の右が本通りと仲通りで、かなりの高層建物が建てられている（田村泰治氏提供）

そしてクリアランスセール（四十二年七月）のあとには、この商店街のピークを迎えた。ヨーロッパフェアが企画され、英国大使館商務官などの来町を得て、四十五年（一九七〇）十月に十日間にわたって開催された。これはイギリス、フランス、オランダ、西ドイツ、スペイン、スイス、イタリアの七カ国、県、市、商工会議所、各新聞社の後援によって実施された。七カ国の大使を招いて、クリフサイドでレセプションが行われたのを初めてして、ワゴンセール、イギリスデー、スペインデー、スイスデー、オランダデー、西ドイツデー、そしてファッシュショーンまで行われた。

それに全面歩行者天国にした商店街の道路にはパレード、そし



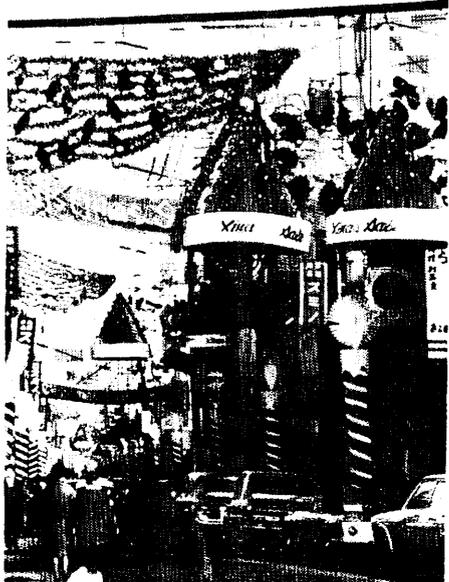
ヨーロッパフェア〈元町SS会提供〉

て街にはカフェテラス、オークション、人形展などが多彩にくり広げられた。連日マスコミにとりあげられ、盛況となった。その結果は「元町のイメージアップになったのは図り難く、今後の元町としての効果に偉大な貢献」（協同組合元町エスエス会『30年の歩み』）をしたといわれた。このヨーロッパフェアの商法のうち、チャージングセール（四十六年二月）のアイデア商法によってますます高級品の売れゆきが増加していくことになる。

商店会の役員は「元町の商店街は、宣伝ひとつにしても、他にない斬新なアイデアをもっていこうということをやって来ました。「サマーセール」「クリアランス・セール」などという言葉もかつてはこの商店街でも使っていなかったんです。現在でも



同上



クリスマスセール〈元町SS会提供〉

「チャーターリング・セール」は、元町だけが使っている言葉ですよ」（元町 竹沢竹雄氏談）と自賛した。

●国際親善―すでに、元町の町づくりがととのった四十二年十月、商店街の有志四七人はヨーロッパ主要商店街を視察。ロンドン・パリなど六カ国七商店街と姉妹商店街を決め親善提携に成功した。商品の交流や情報の交換、そして流通経路の短縮と安い直輸入を図り、オリジナルな商品の開発にも努力した。これによって大いに元町は宣伝されたが、今度は四十六年三月、西ドイツのハンブルグを中心とした小売業者連盟一行一二〇人程が、二回にわたり来町するなど、外国との連携が緊密となっていた。こうした外国とのつき合いのなかで、国際色はさらに強くなっていたのであった。

このような元町のイメージアップと、あらゆる手段のセールスのほか、他方では、元町自体の地形からくる不便さを克服するために、町自体の努力が重ねられていった。

●街づくり―新しい町づくりは、ネオンアーチ街路灯の建設、壁面線の後退という都市改良的な手法で考えられていったのである。三十三年一月、この費用として間口一間当り一〇〇円を単位とする日掛・月掛による準備金が積み立てれることがきまるなど、具体的な方法が考えられはじめた。息の長いこの改造はそれから九年半後の四十二年八月にいたって、県や市の助成金を得て九五パーセント（工事費六億六千余万円）が完成することとなっ

た。同じ月、それを祝って町造り完成パレードなどが行われた。さらに、四十六年（一九七二）一月には、毎週日曜日にかぎり午後一時から五時まで、歩行者天国を実施した。これとともに、建物も大型高層化していき、四十七年には、元町朝日マンション、元町プラザ（増徳院跡 八階建）などが建てられたのであった。

前に述べた各種のセールス、国際交流、町づくりの三位一体の方策は、五十年代に入ってその成果を表わし、現在にいたっている。だが、この順調な動きのなかにあつて、元町の戦後には珍しい労働争議が、ウルベ製帽で発生していた。争議は昭和三十六年十一月に発生し、長期化した。しかし昭和四十三年十月、SS会役員らの仲介の労が実を結んで、労資双方の自主的な話し合いの



元町プラザ（昭和54年）



元町の薬師堂―川岸の中央部

もとに、六年十一カ月ぶりに解決されたのだった。

一方、元町の町内会では、町の人々の崇敬が篤い鎮守巖島神社にたいして、四十年には伊藤清藏の旧邸宅の寄贈をうけて社務所兼集会所を、四十三年には玉垣を奉納、次いで五十二年六月には境内に大神宮社、金比羅宮社を奉祀するなどが、有志によって行われている。また、増徳院なき跡の、元町の象徴ともいべき元町葉師堂が四十七年、三階建鉄筋造りで建立された。元町はまさにあげ潮に乗っていた。

(3) モトマチ・アン

●石川町も変る——石川町駅の設置は元町だけでなく、駅周辺の商店街を刺激し、商店会の結成をうながした。

国鉄の設置の計画が示された時点の三十七年(一九六二)七月、表通り、裏通りを含めて石川町二丁目から四丁目、五丁目の商店によって「ひらがな商店街」が結成された(現在六二店)。これは当然、駅の設置にともなう対応であった。いままでの一丁目だけの商店会、石川荳商栄会の延長線上の商業地区が組織化されたことになった。これにともなって、石川町のかつての庶民的な雰囲気の上に商店街化の状況が加わって、一丁目の商店は四八店(四十七年現在)のうちスナック四、レストラン一、バー一、喫茶店四というように、生活必需品関係以外の店も進出して来た。そのうえ四十九年七月から元町の歩行者天国が延長されてきて、店のつ

くりもすべて元町的で、ともすれば外国風の店にしつらえられた。

駅のまわりの二丁目にも、若干の盛り場的な雰囲気生まれ、朝夕乗降客でにぎわうようになった。

●沈船——しかし、町のこうした変化とは別に、石川町治いの堀川や中村川には使えなくなったダルマ船やハシケが、不法に川岸に置き去りにされる事態が生まれ、なかには腐って沈没する舟さえでてきた。駅前が美化されるのはうらはらに、堀川の場合こうした船の残骸に埋った。これは都市の美観を汚すだけではなく、舟運交通の上でも大きな障害となった。この傾向は海運界の低調を見せた四十年代に、特にはげしくなっていた。

中区のはしけ溜りなかで、関内の弁天橋と大江橋の間の川辺にもやうハシケの群は、朝に夕にミナト町の独特の光景を演出するのにたいして、この堀川は対照的であった。

当然、この環境浄化については、地元町内会から市への陳情が行われた。市では、沈船の処理には頭を痛め、「不法遺棄」を取り締る一方、これを曳行し焼却処分したのであった。

しかし廃船を利用して内部に設備を施し、木工場としたりする者さえ現われ、さらには駅前の河岸の廃船には、内部を改装、サロン風のギャラリーにする者も出て、浄化を唱える地元に対して、既成事実のもとに営業権を主張した。そこで市では関係法規のもと、河川管理の行政上の難点などもあったが、困難の末、昭

和五十年代には市内で約一七〇隻、うち中区内は七〇隻で、七〇隻のうち二七隻を焼却処分とした。内訳は中村川、堀川で七、大岡川で三、新山下運河で四、小港団地附近で三、山下ふ頭で一〇隻であった。

●ゴミの川―かつて、生産や生活の川であった堀川、中村川は、かくて廃船・沈船によって埋まり、川岸の美観をそこねるといっただけでなく、河川のはしけの運行にさしさわりがあった。特に河川清掃船がなかなか入れず、管理上困難をきわめた。清掃は二隻で作業するが、昭和五十年代には、一カ月になんと一隻で七千トンのゴミを収集する始末であった。結局、川面がほぼきれいになるのは五十六年度であった。

●文化の色合い―昭和五十年代、この地区での活況はさらにつづいていた。例えば、元町のSS会では五十三年度の子算は一億四、三七六万余円に上った。うち宣伝費は七、七〇〇万円であった。五十三年十一月、元町が文化的催事として打ち出した Artist in Motomachi(アーティスト・イン・モトマチ)の新企画が実施され、町の通りでは似顔絵画き、ミニチュア絵画展、などが好評を得た。

また、いま一つ五十年の十二月七日、三丁目の汐汲坂の途中、横浜学園付属元町幼稚園の運動場内に、作家中島敦の文学碑が建てられた。

中島敦は昭和十年代、幼稚園の位置にあった横浜高等女学校

(現、横浜学園)の教師をしていたゆかりから、同僚や教え子たちによってここに碑が建てられたもので、碑には名作『山月記』の冒頭が肉筆を基にして刻まれている。

●地蔵再建―五十二年(一九七七)十一月、都心プロムナード事業としては三本目にあたる石川町駅から山手につづくルートが完成した。このことによって、石川町の一部も観光地に組み込まれ、中華街南門通りの壁面練後退を含む町づくりのきっかけとなった。

一方、地蔵坂は自動車の往来がはげしい幹線道路として、相変らず重要な交通路であったが、坂の名の由来となった地蔵尊は、時代とともに変遷を経ていた。震災によって亡失、再建されたものの戦災によって再び失ない、その石塊を体内に納めて、戦後石工某によって坂下に建立されていた。

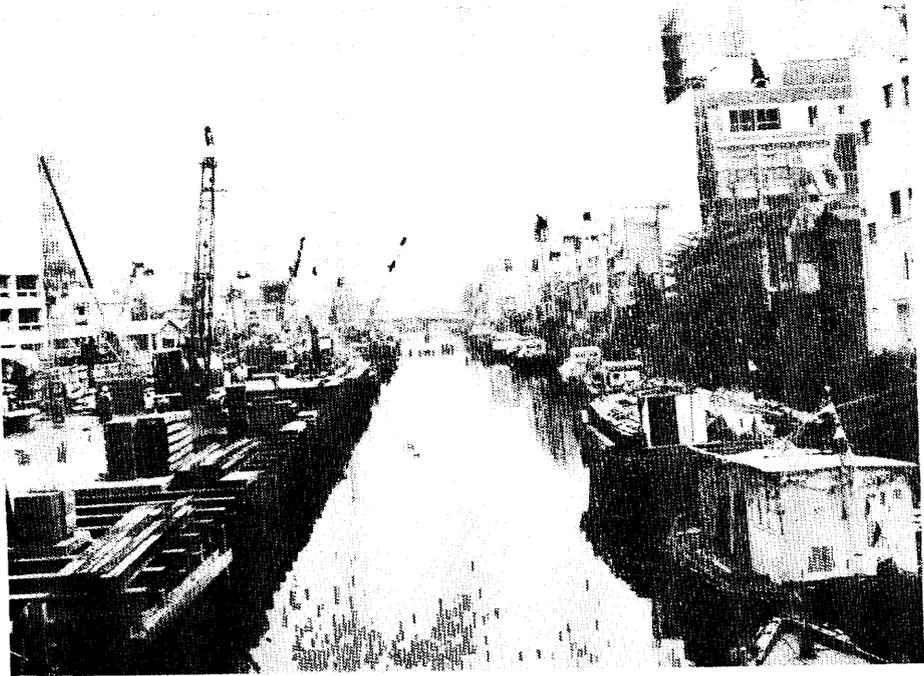
五十四年(一九七九)九月二十三日、地元町内会有志によって新たに別の地蔵尊が坂上に祀られた。この地蔵尊は、サムライ商会の野村洋三からくず生糸貿易商のオドワイの所有するところとなり、のち転々としたものであった。

地蔵尊再建を契機に、ひらがな商店街では緑日やワゴンセールなどで景気づけを行ったが、これは盛況となった。

それにしても、この地蔵尊再建は、地蔵坂の地蔵ということでは人々の追憶がよみがえり、浄財申し込みが多く、意外な評判を生んだものであった。こうしたことはこの地区ならではのことで



中島敦文学碑―『山月記』の冒頭を刻んでいる



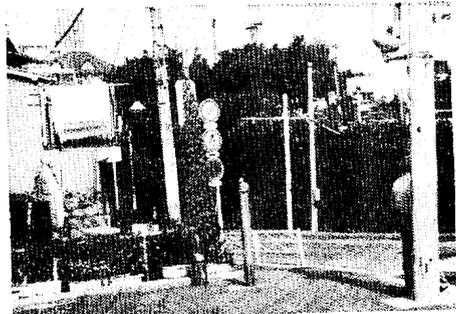
工事中の高速道路（昭和55年）

あった。

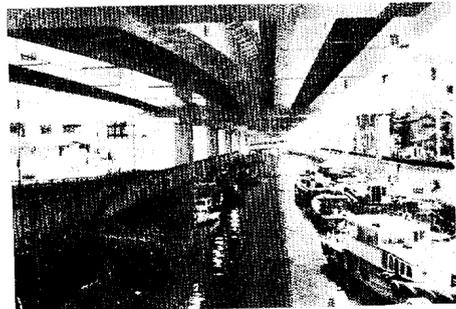
こうしたなかでも、昭和五十年、高速道路の延伸の問題がもち上り、これを容認するかどうかで、元町・石川町ともに論戦が沸いた。結局、川の上に高く道路を建設することで結着、五十六年着工され現在工事中である。

●元町はいま——いま堀川に並行して、元町商店街がある。相変わらず外国と結んでの直輸入など、経営への努力がなされており、圧倒的に衣料品店が多く、エキゾチックな町、ファッションの町といわれている。

元町の一丁目は海に近く、山下町側からの入口にあたる。入口角の加賀町警察署元町派出所は、昔の関門を思わせるが、町全体



地藏坂上——左手に地藏尊



完成した高速道路

の雰囲気は魅力あるヤングの町となっている。元町のメインである商店街通りには、八階建ての朝日元町ビル（四階以上住宅）をはじめとし、四、五階建てのビルが並び、多くの商店がテナントを占めてにぎわいをみせている。元町の商店がビル化しはじめてきたのは昭和三十五、六年頃からだが、現在四階以上のビルは一棟を数えている。

五丁目には石川町駅側からの入口で、東京ほか県の内外からの若い女性たちで道一杯に埋まり、モトマチはいつも花盛りとなる。土曜、日曜には歩行者天国も実施され、折にふれて多彩な行事が行われている。「来客は、電車利用者で三十分〜六十分の所要時間の人々が圧倒的に多い。商品が豊富で信用のおける店、さらに商品を吟味できる」（『横浜の消費者行動と小売商業』昭五五・三、横浜市刊）ということが、客を呼ぶ大きな要因の一つのようである。

元町のイメージについて、地元商店街の発行しているタウン誌『モトマチアン』では、ファッショナブル、エキゾチック、オリジナル、トラディショナル、チャーミング、横浜らしさ、そして自由さ、といったように元町のイメージを七種にまとめ、「元町は、時間と空間に共生する多彩なイメージの交錯する町である」（菅原一彦「ファッショナブルでオリジナルな『モトマチアン』2号」として評価もある。

●古き——こうした華やかな元町商店街にたいして、山手の丘す



元町商店街のにぎわい



元町商店街のにぎわい

その起伏にくい込む町域には、いまだに元町の古さが見られる。それは、古い職人町のおもかげであり、横浜の歴史的遺蹟であったりするのである。

一丁目の商店街の裏は深い緑に囲まれた元町公園、山手本通りに沿ったがけの下には横浜市営元町プール、弓道場とがある。特にプールでは多数の市民が夏を楽しむ。ここは、山手につづく道で春ならば桜がたのしめる。そして外人墓地の裏側に当たっているこのあたりは、エキゾチズムにひたることもできる。普通では見落してしまうが、どうかするとジェラルルの瓦の細片が道に露出していることもあるが、訪れる人々には興味や関心はあまりないようだ。

●坂——二丁目あたりは、代官坂によって山手町と北方方面に結ばれている。坂の途中には、横浜村名主であった石川家の武家屋敷風の長屋門が、往時をしのばせてくれる。その門の前に日本プロテスタント発祥記念碑がひっそりと建つ。この坂はまた元町公園の入口ともなり、あたりはみどり豊かな公園の一角である、市民の散策は絶えない。坂をのぼりつめると代官坂トンネル、馬蹄型の闇の向うは、上野町方面への道である。トンネルの入口右には、ヨコハマで斯界しかいの老舗キャバレー・クリフサイドがあり、いかにも元町の雰囲気を代表するかのようである。

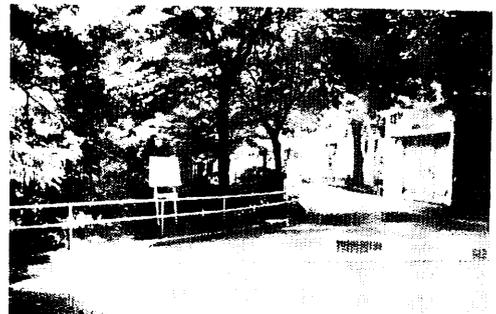
三丁目、四丁目は汐汲坂で山手本通りに結ばれる。前に述べたが坂の途中の作家中島敦の文学碑は、数少ない横浜文学散歩コー

スとなっている。四丁目、五丁目は、山手のフェリス女学院の山の下に当たっているが、そこには朱の大鳥居の叡島神社が祭られ、地元の信仰を集めている。最近では初詣の若い人達も多いが、これらの人達のほとんどは山手散歩の帰りに寄るといふ。境内には元町青少年の家、元町自治運営会事務所があって、町の人々の集会場となっている。

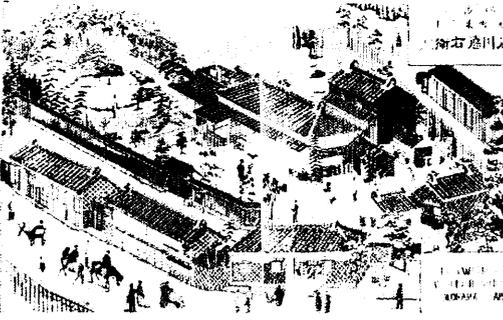
元町と山手との接触も、大小の坂によって結ばれているが、この山の下を通る裏道に数軒の木工場、公衆浴場、しもたやが建ち並び、元町のかつての職人町のおもかげと、古い街並みを今にしのばせている。しかし、この裏道も、表道のファッショナブルでビル化した商店の影響をうけて、しゃれた喫茶店、いま風にいえば「ナウ」な店が多くできていく。時代の推移とはいえ、この元町は、そうしたことのテンポが早いといえそうである。しかし、こうした元町がいつまで続くかと心配する向きもある。いかにしたらその繁盛がつづくか、いま町は考えている。

●石川町にビルが——中村川沿いの石川町は、西ノ橋の通りを境に元町に隣り合せているが、うしろは元町と同じで山手の丘である。商店街は一丁目から五丁目へと続くが、それぞれの活気は違っている。

元町商店街から直線的につながる、石川町一丁目にある石川商店街協同組合と石川老商栄会は、いわば元町的で姉妹商店街といった感じがある。西ノ橋入口には、一〇階建や七階建のビルが



元町公園——正面は水泳場（プール）
管理事務所



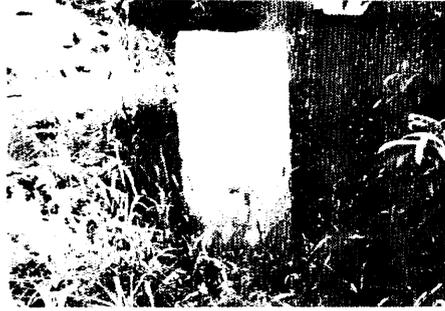
石川徳右衛門邸



石川家の長屋門



元街小学校―新装なった校舎がそびえる



プロテスタント発祥記念碑



巖島神社―左手は元町青少年の家



代官坂



汐汲坂風景―右の建物は横浜学園の元町幼稚園



見晴トンネル、右の建物はクリフサイド

一、二階を店舗（三階以上住宅）としているが、位置は石川町でありながらビルの名には「元町」とつく、一種のコマーシャルというものである。しかしこのビルよりも高く、大きくカーブをとった高速道路の高架が、山下ふ頭に向っている。

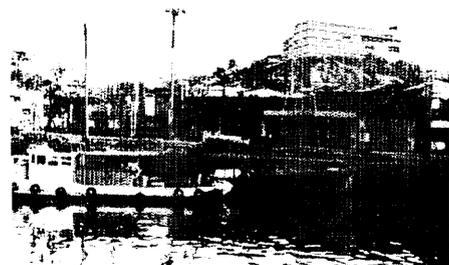
二丁目には、石川町駅ホームや石川町駅前郵便局があるが、元町的な商店街はここまでで、駅から先はにぎやかなひらがな商店街である。二丁目の商店街は地藏坂で終る。地藏坂ののぼり口は、松屋百貨店の前身鶴屋呉服店のあった跡だが、先頃まで鶴のマークのある倉があったが、これもこわされ、現在ビルが建設中である。

さらに商店街は、地藏坂を横切って中村町方面へと伸びているが、三、四、五丁目となるに従って、表通りには商店と一般住宅とが混在している。わずかに石川町五丁目の車橋周辺に、かたまつた商店街（石川・中村勉強会）がある程度である。

●山手の丘下——これら商店街は山手の丘に沿って続いているが、商店街裏の山手の丘すそ一帯はいずれも住宅地帯で、山手とは急坂で結ばれている。三丁目の地藏坂は山手を通じ、その先本牧方面に通じているが、坂の途中と山手本通りに、前に述べたように地藏尊が祀られて、市民の信仰を集めている。この坂の途中は一带の住宅だが、そのなかの蓮光寺は戦災を免れた伽藍で、本堂内陣は非常に豪華である。この寺は開港後或いは震災後、横浜に来た人々の菩提寺でもある。四丁目には、山手の丘を背に諏訪



石川町の入口——ビルが建てられ、元町商店街のつづきとなった



鶴屋のあった川岸、(昭和56年)——マーク入りの倉庫が残っている、いまはビルが建てられている、丘の上には横浜学院の校舎が見える

神社が静かなたたずまいをみせている。五丁目はいわば石川町の西側の入口で、ここも商店が集中し、車橋を境に山元町・根岸方面と関外・長者町方面とを結ぶ交通の要衝であり、地藏坂と同じように自動車交通がはげしい。車橋近くには五丁目町内会館があって、地域の人々の集会所となっている。

この石川町住宅界限は、いまでも下町情緒が残っている数少ないところといわれ、町域には一丁目を除いて高層建物がほとんどない。今後の石川町の抱えている問題は、中村川の上に計画されている高速道路、石川町駅前広場の整備、山手の丘傾斜地の防護対策、その他たくさんある。この解決によって石川町の住む環境が、よくなることが期待されている。

●打越の自然―打越は、石川町五丁目を入口とする。そして打越切り通しの坂を中心とする左右の丘陵地である。切通しにかかる打越橋は山手の丘の尾根道の末端にあたっている。陸橋としては、市内でも大型のもので、橋の大きなアーチは美しい景観となっている。山手尾根道は南区唐沢から平楽へと続いてゆく。唐沢には横浜植木会社がある。打越にはかつての圃場があり温室の一部が残されているが、その大部分は駐車場となっている。

打越は、アパートの多い住宅地帯である。住宅地のなかに、在日大韓基督教横浜教会、マルタ会打越保育園などがある。そしてこの町の切り通しは主要地方道で山元町、根岸、本牧方面への重要な交通路でもある。

道にそった猿坂入口近くの石垣からは、今も変らぬ清冽な泉が湧き、人々の喉をうるおしている。

泉は前に述べたように、道をへだてた向い側にも発見された。

町域の西側は南区で、遊行坂が境界となっている、坂には浄光寺や石川小学校があるが、年々歳々、坂の桜が見事な花を開く、

―打越の自然がここにも見られる。



石川町地蔵坂風景



石川町仲通風景